
The Outlaw Alternative

ゼミル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Outlaw Alternative

【Nコード】

N3152W

【作者名】

ゼミル

【あらすじ】

世界や立場が違ったって、俺達のやる事は変わらない——ルールはただ1つ、化け物だろうが人間だろうが邪魔者は叩き潰す！※この小説は美陰書房様ならびに墜ちた天使の世界様で連載・完結した拙作であるリリなのオリ主物のキャラがメインとなったアナザールートであり、オリ主以外にもリリなのキャラが登場します。初めてご覧になる方はそちらの拙作もぜひお読みいただければ幸いです。この作品も両サイト様にも投稿・掲載させていただいています。がそちらで全話読んだ事の無い方もいらっしゃいましたら、何がど

うしてこうなったのかを推測しつつ楽しんで頂ければ嬉しいです。
最強・キャラ改変&魔改造・ハーレム気味な内容ですので苦手な方はご注意ください。どんな感想・批評・意見も絶賛募集中。

プロローグ（前書き）

リリなのの方がまだ全話掲載が完了していませんが、こちらの作品も掲載をさせていただきます。

プロローグ

1999／08／08..

ペンシルバニア通り1600のウエストウイングのオーバルオフィス（大統領執務室）の今代の主の苦悩を完全に理解出来る者は、彼以外のホワイトハウスの住人には1人もいない。

彼は複雑な背景を背負った男であり、父親であり、元軍人であり、アメリカ合衆国の現最高司令官であり、地球上で最も権力を持つであろう役職に就いた政治家であった。

——だが彼自身、後半2つに関しては『便宜上』が付くと考えている。

今や自国の軍を真に牛耳っているのは、自分ではない他の人間だ。それは統合参謀本部の将官達であったり、自分以外に議会に巢食う政治家であったり、そのどちらにも顔が利く金持ちであったり。

ともかく今オーバルオフィスで文字通り頭を抱えているのは、苦悩し、絶望し、疲れ切った1人の男であった。

「神よ、お許し下さい・・・」

力無くそう呟きはしたが男は悟っている。神に祈ったって何の手助

けもしてくれない事を。

むしろこれは贖罪の叫び。自分の無力さ故、何百人もの兵を死なせる引き金を抑え込む事が出来なかった事に対する懺悔の言葉だった。本来ならこの場に引き籠ってないでイーストウイングの危機管理センターで副大統領や統合参謀本部以下の面々と共に極東の地―彼はどんな地かよく知っている。ああ忘れるものか―で行われている、歴史にも刻まれるであろう一大作戦の行く末を見守ってなければならぬ立場にある。

だが彼は部屋から出ようとしなかった。

ただその時を待っていた。もうすぐ日付が変わる時間帯にもかかわらず、明かりもつけないまま、

「・・・・・・・・・・」

重厚なマホガニーのデスクに置かれたアンティーク調の電話がおもむろに鳴る。たっぷり2回ベルが奏でられてからようやく男は手を伸ばした。

電話の主からの言葉は簡潔で短く、すぐに受話器を元の位置に戻す。

最高級の革張りの椅子の背にもたれかかり、ぼんやりと男は天井を仰いだ。それからデスクの引き出しを開けると、中に収められていた物を懷に収め、立ち上がった。

部屋を出、主が姿を現した事への驚きと心配から声をかけてくる秘書達の声など聞こえない様子で男は廊下を進み、幽鬼もかくやな無表情で男はエレベーターに乗り込む。

目的地は地下に広がる一室である。

その部屋の主は余りにも小さかった。

子供だからではない。成長障害による小人症を患っているのでもない。列記とした青年だ。彼はベッドの上で二十歳になった。

彼には成長した人間に在るべきものが欠けている。腕があるべき所には両肘のやや手前からぽっかりと途切れており、両足の内片方も膝から先が無い。

四肢以外の場所も酷いものだ。人工呼吸器に繋がれ、内臓も半分以上が人工的に作られた紛い物で補われ、頭部もまた顔を隠すぐらいの範囲で包帯が巻かれている。

何せ発見された時は戦車級―憎きエイリアンの中でも最も人を食ひ殺している種類―にその身体を齧られ、顔まで食まれ、^は一体誰なのか判別がつけられない有り様だったのだ。

認識票と肉もろとも戦車級の腹の中に収まらずに済んでいたある物

が無ければ………実の父親である彼でも分からなかっただろう。チェーンにぶら下がった認識票ともう1つ——古ぼけた日本の御守り。

辛うじて心臓は生き残って動いてはいたのだが———脳死同然の植物状態にある。

青年が大統領の息子でなければ安楽死処置がされていてもおかしくない。

2度と目覚めないと分かっているけど、彼は出来る限りの手段で延命させ続けてきた。 magari なりにも与えられた大統領としての権限と権力、父親としての執念を用いて。

———それにも限界が訪れようとしている。

もう、彼の息子の身体は限界なのだ。息子を1年近く任せてきた医者にそう告げられて、彼は窓の存在しない病室を訪れていた。

「すまない息子よ………本当にすまない」

涙はもう枯れ果てている。虚ろながら悔恨に満ち溢れた苦悶の表情を浮かべ、見つめ合う眼すら失った息子を見つめた。

「結局私はお前に何もしてやれずじまいだった。母親にもう1度会わせる事も、母親の生まれ故郷を守りきる手助けも、お前を無事人として戻してやる事も」

子供には聞こえない。青年には届かない。声を聞き取る耳も存在しない。

「その上私は、勇敢な兵を巻き込むのみならずお前の母親の地を穢す手立てを止める事すら出来やしない」

G弾と呼ばれるあの兵器。どれほどの威力か、そしてどれほどの傷跡をその土地に刻むのか彼は詳細に知る立場にある。

だがそれを止める事が出来ない。被害と戦果を両天秤に掛けた上での決定であればまだ納得は出来る。必要最低限な代償が必要なのだというならば、汚名も甘んじて受けてみせよう。責任を取るのが責任者の仕事なのだから。

しかしG弾の使用を何よりも後押しするのは目先の利益に群がる権力者達。腐肉に集り奪い合う許されざるハイエナの群れ。

権力という物は様々な要素が積み上がり、絡み合って形成されていく。金、物資、人脈、情報、暴力。

大統領である彼個人の権力よりも、彼に相反する側の人間達の権力

の方が上回ったが為の、止められぬ悲劇。

『アレ』が使われた結果間違はなく起こるのはこのアメリカへの国際社会からの猛烈なバッシングだ。そして悲劇を招いた者達は、その権力でもってこういうに違いない。『自分達こそが正しいのだから刃向かうな』と。

・・・己の保身と利益しか求めないハゲタカが何をほざくか

彼が誰よりも怒りを抱いている相手は、そうと分かっているながらも何の手立ても打てなかった自分自身にである。

心臓近くから延びるコードに繋がれた機材がピー・・・・・・・・と単調な電子音を発し、規則的な波形を映し出していた画面には平行な1本線のみとなった。

息子は最期の最期まで苦痛を感じないまま逝けたのだろうか？だがそれを知る機会はまだあるまい。

彼は懷に呑んでいた代物をゆっくりと取り出した。M1911コルト・ガバメント。遙か昔、異国の地で幸せの絶頂に居た頃から所持していた軍人時代からの記念品。

この病室には1人の疲れ果てた父親とかつて息子だった青年の亡骸しか存在しなかった。

咎める人間も、止める人間も、誰も居ない。

「・・・こんな形で逃げだしてすまない。だけど、もう――――
私は、疲れたんだ」

年若い、自分を知る伴侶も家族も友人も全て亡くしてしまった老人のような呟き

――――司令部から命令を受けたH S S T（再突入型駆逐艦）から
弾頭が分離される。

スライドを引く。鈍く光る弾丸が薬室に装填。

――――ロケット点火。燃料を猛烈に吐き出し大気圏突入への軌道をプログラムに従い取る。

しばらく手の中の拳銃を見つめる。

———引力に引かれ、摩擦熱で表面を真っ赤に熱されながらも軌道は外れない。

45口径の銃弾は熊すらも撃ち倒し、人間の頭部に当たれば間違いなく脳の大半を頭蓋もろとも粉碎してくれるだろう。

———目標は甲22号目標、横浜ハイヴ。未だ数百人の兵が国籍問わず、人の住まう土地をこの手に取り戻すべく奮闘し続けている。

米神に銃口を押しつける。金属の冷たさが嫌に心地良い。

———それぞれの部隊のCP将校が悲鳴混じりに戦場一帯からのいち早い離脱を指示してきて、兵士達に動揺と戸惑いが走る。

この引き金さえ引けば全てが終わる。

———ハイヴ一帯の光線級が唐突に虚空めがけ照射開始。だが標的となったG弾は弾頭活性化の証たる重力場（ラザフォード場）にねじ曲げられて届かない。

なのに何故まだ引き金を引かない？

———戦闘中の各戦術機機甲部隊、離脱開始。だがもう手遅れだった。

息子は逃げずにエイリアン共・・・BETAと勇敢に戦ってみせた。人の姿すら失ったのだって、撤退命令を無視してまで異国の地で危険に晒された避難民を逃がすべく部隊と共に踏みとどまった結果に

よるものだ。

——もう誰にも止められない。効果範囲内全てを押し潰し、消滅させる黒い太陽。

子供は逃げなかったというのに、自分は死という救いへ向かって逃げ出すのか？それで父親として愛した女に、血を分けた息子に誇れるのか？

本当に、そんな終わり方で良いのか？

時計の全ての針が12を指す。

ワシントンの現在の時刻、〇時〇〇分。日本との時差はサマータイムで13時間。

横浜ハイヴ上空で生まれた黒球が巨大な構造物も、醜悪なBETAも、人の命も。全てを呑み込んで、各々を構成する物質を歪ませ、

すり潰し。

———全てを消滅させる臨界の効果が、時空や次元、因果にすら波及したという現実には、誰も気付かないまま。

そして。

「————何なんだこれは」

つい数秒前まで自殺決行寸前だった事などすっかり頭から抜け落ちた彼は呆然とそう漏らすしかなかった。

遂に息を引き取ったばかりの息子の亡骸があった場所は光に包まれていた。息子は一体何処に行った？

もしこの場に香月夕呼という名の科学者が居合わせれば、彼女もまた驚愕の念に打たれると同時に光の正体も見抜いてみせただろう。

この光を、彼女はパラポジトロニウム光と呼んでいる。

次の瞬間頭を猛烈に殴打されたような衝撃に襲われ、彼は膝を突いた。

一体何だというのかこの感覚は。数度体験した網膜投影によるものとはまた違う。視界に見覚えのない光景が映し出されては脳に直接刻まれていく。

若い頃から魔法研究に携わり、一定の地位を気付いてきた自分。

———そんな覚えは無い。この頃はまだ殻も取れない新米士官だった。魔法なんてお伽噺の産物じゃなかったのか。

スカウトを受け、他に集められた研究者と共に非合法的な研究に携わっていく。次第に罪の意識に苛まれる自分。

———嘘だ。こんなの全然知らない。

不意に訪れた転機。研究所の襲撃を機に、ただ1人の『完成作』である人造人間の赤ん坊を連れだし、追手の目が届かない世界へと逃げだした。

———そんな筈、あの子は私と彼女との唯一の愛の結晶。兵器として作られた産物だという考えなぞ断じて認めない

平穏な暮らし。成長した子供がひよんなことから自身の正体に感付くという出来事もあったが、それでも親子2人の静かな暮らしは続く。

———BETAのいない世界なのか？あそこは本当に逃げ出す様に離れなければならなかったあの異国の地、日本だともいうのか。BETAが存在しなければ、この世界もあかも平和に発展出来ていたのだろうか？

不意に訪れる永久の別離。聖夜、混沌と焦燥の表情で自分を揺さぶる息子と、自身の身を襲った締めつけるような胸の痛みと共に記憶は途切れ。

———此処ではない平和な世界の『私』はそうして死んだのか。悲壮な現実能耐え切れず自死に甘んじようとした自分と比べて、なんと幸せで穏やかな生涯なのだろう。

頭蓋の中に刷り込まれていく記憶……。その代償の苦痛に喘ぎながらも、彼は顔を上げてベッドの方を見やった。

奇妙にも光は次第に縮まり、固まりつつあり、閃光の色も白から変化しつつある。

それは黒。次元の狭間を切り裂いた隙間を覗き込んだかと思うぐらいひ、引きずり込まれそうな深さを湛えた闇。

強制的に覚え込まされていく記憶の本流も痛みと一緒にやがて収まり、意識もクリアになる。ゆっくりと未だ拳銃片手にふらつきながらも彼は立ち上がる事に成功した。

奇妙な感覚だ。今や別人——違う、『もう1人の自分』の人生の記憶の存在に全く違和感を感じない。それどころか『ああそんな事もあったな』とまるで実際に体験したかのような感覚すら湧いてくる程。

「ゼロス」

改めてベッドに向き直ると、いつの間にか光は消え去っていた。ベッドの上の変化を捉えた途端、目が限界まで見開かれる。

息子の身体、四肢の内もう存在してなかった筈の両腕と片足が解けた包帯の先から唐突に生えていた。

それだけではない。中身の殆どを失って不自然にへこんでいた胸腹部は正常な膨らみを取り戻していた。表面を覆うシャツが見る見る間に紅く染まっていく。

頭部もまた包帯が解け、端正な造形が姿を現していたが、その顔にも多数の傷が刻まれていた。まるでずっと戦場に居て大怪我をしたばかりにしか見えない風体と化している。

フラットなラインを描いていた筈の心電図に起伏の浅い、しかし紛れもない心臓の鼓動が表示されだした。何らかの拍子で人工呼吸器が外れていたが、弱弱しくもしかし目に見える形で自力で呼吸しだしている、不意に彼は歓喜の感情に襲われた。

どんな状態であれ、再び息子は息を吹き返したのだ。それだけでなく、理由はさっぱり分からない物の彼自身の腕と足すらも取り戻してま でいた。

ベッドに横たわっているのは彼の息子だけではない。

生気を感じられない亡霊の如き白髪の青年もまた、大きめのベッドにうつ伏せになって動かない。頬の傷跡を除けば美少女に見えなくもないが、とりあえず彼も傷だらけの様だ。

光と共に肉体を取り戻した息子と何処からともなく出現した重傷の青年、そしてもう1人の己の記憶の流入の理由に悩むのは後回しにして彼は大急ぎで医者呼びに飛び出す。

だもんだから、白髪の青年の影に隠れて気付かなかった新たな物品の存在——黒曜石よりも深い漆黒の宝玉が埋め込まれた十字架の存在と正体に気付くまで、まだもう少し時間が必要になる。

『……一体全体何が起きたんでしょう』

彼らの出会い／再会はまあ、こんな感じ。

今更ながら、ここで彼らの説明を行うとしよう。

『彼』の名前はレイス・シルバーフィールド。

ある世界では元科学者で元魔導師だった逃亡者であり、しかしれっきとした良き父親だった男。この世界では、張りぼて同然のアメリカ合衆国大統領を務めている。

息子の名はゼロス・シルバーフィールド。

ある世界では戦闘機人という名の兵器として生み出された人造人間であり、その実平穏を望んでいただけであり——その為に管理局史上最強最悪のテロリストと化した、極端な男。

この世界ではある想いの為に軍人となり、極東で戦い、全てを失い、

それでも死ねずもはや絶望すら感じないまでにボロボロになってしまった哀れな青年……の、筈だった。

限りなく近く限りなく遠い、鏡越しの世界の様に、決して触れ合わない筈の世界の因果が交差した時。

彼らの物語が、産声を上げた。

M u v - L u v T h e O u t l a w A l t e r n a t i v e

プロローグ.. R e - b i r t h

さあ、ご都合主義満載のハッピーエンドな『おとぎばなし』を始めよう。

TE編1..ユウヤ・ブリッジスの憂鬱（前書き）

※既にユウヤは魔改造済み。徐々にその実力を発揮していかせる予定です。

TE編1…ユウヤ・ブリッジスの憂鬱

ユウヤ・ブリッジス少尉はゼロス・シルバーフィールド『中佐』の部下である。

実際にそんな立場になったのは先月ぐらいの出来事で、付き合いそのものは年初めにグルームレイク基地に中佐が赴任してきてからすぐだから大体4ヶ月程度か。

当時からゼロス・シルバーフィールド―並びにその仲間2名―は米軍内でも中々の有名人だったと言っていていいだろう。

元々アメリカ合衆国大統領の息子であり極東で壊滅した部隊のただ1人の生き残りで自らも大怪我を負いパープルハート勲章を授与され、それでもなお長きに渡る昏睡状態から短期間で軍務に復帰、などと大々的に広告塔扱いされていたからユウヤも名前ぐらいは知っていた。

ユウヤが配属されていたグルームレイクに来てからは更にその名を轟かせてみせた―――良い意味でも悪い意味でも。

つかぶっちゃけ悪名の方が多くな？とユウヤはブルームレイクでも積み重ねられていった逸話の概要を思い出してげんなりする。

『軍団規模のBETAの5分の1を単騎で撃破、誘因し、乗っていた戦術機が壊れても機体を降りて『生身』で更に撃破数を増やす』

『ぶっ続けてシミュレーターに乗り続けて逆に機械の方が根を上げた。本人は至って平気な顔をしていた』

『PXで喧嘩になった際特殊部隊上がりの屈強な男達10人相手に1人で血祭りにした』

『上官をぶん殴った経験あり。中には将官も含まれているが相手が悉く不正に関わった事が発覚してお咎めなしになったり行方不明になったりして有耶無耶になる』

『出鱈目な機動をやって乗ってる本人よりも機体の方が根を上げる。ログを調べてみると普通の衛士なら気絶物のGがかかってるのに本人は（ry』

『模擬戦にてF-15<イーグル>の改良型1個小隊で教導隊のF22<ラプター>1個中隊を殲滅。F22の内半数をスクラップにした』

前2つはともかく半分は実際目の前でやられたもんだから冗談のネタにすら出来やしない。

・・・最後のF-22撃破の下りは実際にユウヤもやらかした内の1人だったりするのだがそれはともかく。

付いた渾名が『鉄の鬼神（D e r m o n o f I r o n）』『壊し屋』『史上最強最悪の軍人』。

とにかく話題には事欠かないのがこのゼロス・シルバーフィールドという男。ユウヤ自身、ゼロスに対する印象は『無茶苦茶で破天荒で絶対に怒らせたくない相手』てなものである。

それを差っ引いても、ゼロスには魅力があった。

とにかく人の都合なんて気にしない。人の抱える悩みなんて一刀両断、逆に悩んでた事自体どうでも良くなってくる。そんな気持ちにユウヤ自身させられた物だった。

部下や同僚など、『身内』に対してもかなり甘い。

ユウヤの事を腐す人間（半分日本人の血が流れている事だけでそうする輩がまた多い）が居ようものなら躊躇い無く喧嘩を買う。そして潰す。売られた当人のユウヤが逆に止めに入るほどの勢いで。

ありがた迷惑な話だけれど———そんな彼、そして彼の仲間に救われてきた事もまた事実。

まあ、それでも。

ネバダ州グルームレイクからはるばるアラスカまで3000kmオ
ーバーの旅路を『戦術機』に乗って踏破させられる事に対しては、
流石に一言物申したい。

TE-1..ユウヤ・ブリッジスの憂鬱

荒涼な砂漠のど真ん中も地平線まで広がる緑豊かな大自然も、何時間もの間延々コクピットの中に閉じ込められてる身からすれば結構大差無い。どっちにしたって変わり映えのしない詰まらない風景でしかないのだから。

ようやく拡大した網膜投影の映像の中に目的地——ユーコン基地の姿を捉え、ユウヤは深く深く息を吐き出す。

その音声を捉えたのか、繋ぎっぱなしの通信の向こうでからかうような男女の声が送られてきた。

『おいおいユウヤ、流石のトップガン様も3000kmもの距離の巡航飛行はお疲れか?』

「うっせーぞヴィンセント。こっちは同じ姿勢のままずっと管制ユニットに縛り付けられてるんだ、マトモな座席とコーヒーのあるそっちとは大違いなんだぞ」

『いいじゃないですか、そっちは人間工学と強化装備のお陰で快適な姿勢で居られるんですから』

『そーそー、座席は固いしコーヒーもマズイときたもんだし』

「なら替わるか？」

『そうしたいのは山々ですけどそちらから送られてくる機体データの分析を行わなければなりませんから』

『俺は整備兵であってユウヤ達みたいなトップガンじゃないから無理だって』

通信の相手はヴィンセント・ローウェル軍曹とリベリオン・テストアロツサ特務大尉。

ヴィンセントはグルームレイクに配属された頃からの相棒的存在で整備兵。軽薄そうな見た目の割に腕は一流、陽気で気が利き、ゼロス達が来る前はよく人間関係に関して彼のフォローを受けたものがある。

リベリオンはゼロスと共に知り合った面子の1人。元は企業から出向してきた技術者であり開発してきた新兵器や戦術機の改造プランは多数。どれも高性能と評判でしかも凄腕の衛士でもある多芸家だ。ポジションは主に後衛。おまけに超絶美人。何という完璧超人。

2人共ユウヤの乗る機体に併走して飛んでいる輸送機、An225<ムリーヤ>の乗客として乗っていた。

An225が背負った2つの輸送コンテナに収められているのはリベリオンともう1人の仲間、ユーノ・スクライア特務中尉の機体で

ある。

ユーノは顔に刻まれた傷の存在があっても10人中8人は女と見間違ふほどの柔和な美貌の持ち主だが、常日頃から張り付いている笑みの下には修羅場を飽きるほど乗り越えてきた戦士の凄味が潜んでいる事をユウヤは知っていた。あの生気が抜け落ちた長い白髪はその代償なのだろう。

『ここまで動力系・管制系・機体各部にも異常警告や動作不良は無し……十分なデータが得る事が出来ました。どうです、2人の方でも何か機体に違和感などは感じられますか？』

機体各所に設けたセンサーからの情報のみで結論を出すよりも、実際に機体を操る衛士でなければ気付けないような変化もまた重要な判断材料になる。

足元のペダルを僅かに踏み込んで機体を揺らし、両手足に伝わってくる振動から機体のコンディションを図ってみた。輸送機を挟み込むように飛ぶ2機の戦術機が小刻みに踊る。

『こちらアウトロー0、特に違和感とかはしない、快調なもんだ』

「こちらアウトロー3。こっちも全く機体に異常を感じない。このまま戦闘機動に移っても平気なんじゃないか？」

『あー、ユウヤ。そういう事はあんまり言わない方が良いぜ？だって……』

ゼロスの言葉を遮ったのは索敵レーダーからの警戒警報。2機の戦術機が急速接近中。

『……実際にそうしなきゃなくなる羽目になりやすいからな』

『『ユウヤ……お前（貴方）って奴（人）は……』』

「ちょっと待て！何だよその目、俺のせいなのか！？」

うろんげな目で揃って見つめられて思わず絶叫。ゼロス達と関わるようになってからしよっちゅうこんな反応ばかりしている。

ゼロス曰く「お前はツツコミ属性持ちだから仕方ない」だとか。コメディアンになった覚えは無い。

そこに今まで話に加わっていなかったユーノの声が割り込む。

『ユーコン基地の演習スケジュールにアクセスしたよ。広報用の撮影飛行の筈がどういう訳か本物のドッグファイトになっちゃったみたいだね』

「それでどうするんだ、あの軌道だと真っ直ぐこっちに突っ込んでくるぞ！」

仮にも上の階級の人間に対して相応しい口調ではないがこの部隊——アウトロー隊ではいつもの事だった。

グルームレイクではトップクラスの腕前だったが問題児でもあったユウヤの方が、部隊の中では最も軍人らしく見られるほどののだから。

『こつちから突っ込んで追っ払うなり止めるなりするしかないだろ』

『長距離巡航飛行後の戦闘機動テストとしても丁度良さそうですね』

『ああそうそう、もし向こうが撃ってくるようだったら気をつけた方がよいよ。攻撃演習用に実弾も積んでるみたいだから』

『まあ頑張れよトップガン。俺には応援しか出来そうにないから。あ、でも絶対に機体傷つけるような真似すんじゃないぞ！ちよつとでも痛めようもんなら整備兵一同でレンチお見舞いしてやつからな！』

「やっぱりかよおおおお！それからヴィンセント、それはゼロスの方に言ってやれええええええ！」

抗議の悲鳴を上げながら輸送機の前方をフライパス。本来の飛行コースを外れ、接近中の2機に相対する軌道に機体を乗せる。

『オーバードブーストで真正面から突っ込むぞ。相手とキスだけはするなよ!』

「分かってる、そんなへまはしないさ」

思考のスイッチを戦闘モードに切り替える。目線を動かすだけで網膜投影されたパラメータの中からコマンドを選び出し起動させた。

後ろの方で膨大なエネルギーが収束する音色が伝わり、直後機体ごと蹴りつけられたような衝撃と共に重力がユウヤの身体にのしかかってきた。ここ最近で慣れ親しんでしまった圧迫感。

『ロックンロオオオオオオル!!!!!!』

速度計が急激に数を増やしていくのに反比例して、闖入者との相対距離を示す数字がみるみる内に減っていく。

廻り回すかのように追い立てられ始めてからの10分程がF-15・ACTV<アクティヴ・イーグル>を操るタリサ・マナンドルには数十倍の長さに感じられた。

その焦燥の度合いは輸送機が往来する空路を突っ切る事も辞さないぐらゐに追い詰められている程で……。それでも空中衝突は是が非でも回避すべくしつかり注意を払っていたから、こっち目がけて前方から飛んでくるエレメント（2機編隊）の存在にもすぐに気付く事が出来た。

相手の方も知らせる気満々な様子で、レーダーの範囲内に達した途端前方のエレメントからもロックされたという警告が鳴る。

しかし、タリサの想定―そして彼女を追いかけていたSu-37<チェルミナートル>の度肝を抜いたのは―エレメントの接近速度がとんでもなく速かった事だ。

「何だ一体・・・!?」

『Y a a a a h a a a a a !』

『クソツタレエエエエエ!!』

向こうの飛行速度は最低でも1000kmオーバーの亜音速。タリサ達の飛行速度と合計すれば軽く音速を超えていたに違いない。

その速度を維持したまま突っ込んできた2機は、付かず離れずAC TVに食らいついていたSu-37との僅かな隙間に見事に滑り込み通り過ぎる。

泡を食ったのはむしろタリサとSu-37の方で、慌てて反発した磁石の様に距離を開けさせられドッグファイトを中断させられた。認めたくないが、例の2機に救われた事をタリサは自覚していた。

持ち前の負けん気からと『助けられた』事への無生な腹立たしさから、口から飛び出したのは礼の言葉ではなく甲高い怒声だったのはご愛嬌。

「バツキャロー、何考えてやがんだテメーら！」

『それはこっちのセリフだ。管制塔からの通信がこっちにも届いたぞ。演習場から外れてこっちまで飛んできやがって』

「ンだとお!？」

突っ込んできた片割れらしい若い男からの通信に目尻が吊り上がる。網膜投影に移ったのは東洋系の青年の顔だ。

いつの間にか超高速で通り過ぎて行った筈の2機の戦術機が反転して、タリサのACTVとSu-37の後ろについていた。それだけであのエレメントの機体はかなり高い運動性能の持ち主である事を悟る。

亜音速を叩き出す高速直進性と反比例するかのような小回りの効く

機動性能。その戦術機への興味がみるうちにタリサの中で膨らんでいく。

やがて目の当たりにした相手の機体は、タリサの期待に違わぬ物珍しさに満ち溢れていた。

まず目を引くのはスラスターの位置。目に見えるだけでも従来の戦術機と比べかなり多い。

F-15・ACTVは高出力化された1対の跳躍ユニットのみならず背部に1対、両肩部装甲にも1対のスラスターが増設され計6ヶ所もの推進機構は癖の強い操作性と引き換えに大きな機動力を得た機体だ。

だがACTV以上の機動力を秘めていると見せつけるかのように、その2機には更に多くのスラスターを備えているのが見て取れる。

ACTVと同じ3対6ヶ所以外にも太腿の裏側にも内蔵型の小型スラスターが1対、背部スラスターの1段下にも中心部に双発タイプの物をどちらの機体にも有していた。腰の跳躍ユニットも後部から腰の両横に移動しているし、従来品よりも薄く短くコンパクトだった。おまけにこっちも双発らしい。

加えて言うならば両肩のスラスターはACTVのそれよりもかなりスマートで、あれなら従来の機体同様自立誘導弾システムも運用できさるだろう。

機体のカラーはそれぞれ靴墨より濃い漆黒一色と白と灰色の淡いモノトーン。機体のサイズそのものはかなり大型だ。

どちらも大まかな特徴は同じでもコンセプトそのものは別種の存在らしい。どちらとも両肩のスラスターの噴出口の下からは板状の小さな追加装甲が垂れ下がっていたが、漆黒の機体はその外側にSu-37と同じく固定式ブレードを、モノトーンの機体の方は大型ミサイルが取り付けられている。

ACTVでは背部スラスターの搭載によって潰されている兵装担架を、あの2機の場合はその背部スラスターの外側に移動する事で確保していた。

人間で言う脛から下、足首までの部分はこれまでの戦術機はどれも膝周りの半分ぐらいの直径まで先細りしている物だが、この2機は違う。より太く装甲も分厚く、外側に小型のミサイルポッドまで取り付けられてあるという重武装っぷりである。

他にもちよこちよこ相違点はあるものの、どちらもタリサが今まで目にしてきたどの機体とも違うし改良機にも見えない。間違いなく新型機だ。

どちらの機体の右肩には所属部隊を示すペイントが刻まれている——数字の『0』と中心部に宝玉を備えた十字架が重なり、そのバックに銃と剣、いや黒い刀身のカタナが交差した緻密で印象的なデザイン。

『こちら合衆国陸軍所属、ゼロス・シルバーフィールド中佐』

「いいっ!？」

東洋系の衛士に続き通信を繋いできた相手に思わずタリサは素っ頓狂な悲鳴を上げかけ、慌てて飲み込む。

まさかよりもよって佐官のお出ましとは。しかも強化装備姿という事は今タリサ達を止めに割り込んだ機体のどちらかの操り手に違いない。

『広報任務で飛んでた筈が何がどうなってガチンコのドッグファイトをおっぱじめたのかは知らんがここいらでお開きしてくれ。こっちにも喧嘩売ろうってんなら高値で買い取っても良いんだぜ?』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

追いかけてこの間もこれまで無言だったSu-37のの衛士（無愛想なムカつく銀髪女のコンビ）は、所属が違うとはいえ上官に一言も言わないまま空域を離脱していった。

ぶっはぁ、と盛大に一息つく。似たような音が通信の向こうから聞こえてきた。発生源は東洋系の衛士の方だ。

『・・・こんな際果てまでわざわざ戦術機で延々飛ばされたかと思ったらこんなお出迎えかよ。冗談じゃねえ』

向こうがそう吐き捨てるのもすっかりマイクに拾われてタリサに届いていた。

追っかけまわしてくれた相手が居なくなった段になってついつい勝気で短気てカツとなりやすい性格が首をもたげてしまい、上官の存在も忘れて噛みついてしまう。

「へーんだ、邪魔が入らなきゃもう少しでこのタリサ様が華麗な機動で逆転する所だったのによー」

『ハア？何強がり言ってるんだ。見てて良い様に追い立てられてたの、丸分かりだったぞ』

「んだとお！？」

『はいはい喧嘩すんなよその2人。せっかくこれから一緒にやってくつてのに』

『喧嘩じゃなくて向こうが勝手に噛みついてきてるだけだっけの』

『だからユウヤも煽るなって。つか、コイツはお前が入れられる部隊の人間だった筈だぜ？』

『え？』『へ？』

『タリサ・マナンドル。アルゴス小隊所属、だろ？』

銀髪碧眼の青年が悪戯っぽく笑ってみせた。

『つか、さっきのソ連軍の衛士もコイツらと一緒に組ませて俺らの方で色々仕込んでく予定の相手だから』

いまサラッと聞き捨てならないことおっしゃいましたよこの人。

アタシが、あのいけ好かない無愛想コンビと一緒に？

[illegible]

「ふ、ふ、ふ、ふつぎけんなああああ！！！」

今度こそ。

上官が相手である事をさっぱり忘れて、タリサは雄叫びを上げてしまった。

TE編2..篁唯衣の遭遇

フェニックス構想とXFJ計画。

どちらも大雑把にひっくるめてしまえば、既存の戦術機の改修・グレードアップを実現する為の研究だ。

フェニックス構想は第2世代機のベストセラーであるF-15<イグル>をボーニング社の主導で、XFJ計画の方は日本帝国軍が運用するTYPE-94<不知火>を日米合同で強化していくプラン――

というのがユウヤがユーコン基地を訪れて初めてのブリーフィングで聞かされた大まかな内容である。出発前にリベリオンから教えられた内容と何ら変わり映えしないというのがユウヤの正直な感想。

こう言ってしまうと確実にこれから共に働くアルゴス小隊の面々からの颯感を大いに買うのは間違いないだろうが、フェニックス構想の方はユウヤは然程興味を抱く気にはならない。

何故なら既に既存のF-15を改修・強化するという考えがここユーコン以外でも実行され、現実に達成された姿をユウヤは目の当たりにしているのだから。

「そっちが作った『アサルト』と『ブラスト』以外にも他がイーグルの改修型なんて作ったりしてたんだな」

「ボーイングの方はG弾などのBETA由来の技術応用に傾いたせいで予算を削られた戦術機開発部門を立て直す為の苦肉の策で提案したそうですよ。我々にとっては単なる商売敵の最後の足掻きでしかありませんけどね」

ブリーフィングルームの最後尾の列で隣のリベリオンとヒソヒソ話を交わす。

F-15・ACTV以外にもF-15の強化改修機は開発され、既に実戦配備が開始されているのをユウヤは知っている。というか、開発者が誰かも良く知っている。

新興企業のバニングス・インダストリーズが開発したF-15EX<アサルト・イーグル>並びにF/A-15<ブラスト・イーグル>。

リベリオン・テストロッサこそが、バニングス・インダストリーズから鳴り物入りでアメリカ陸軍へと出向してくるやいなや、見事F-15の強化改修機を完成させてみせた張本人なのである。

TE
—
2
..
簞
唯衣の遭遇

美女の絹の如く滑らかな肌を水滴が滴り落ちていく。

もしその様子を見ている物がいたならば男はその完璧に整ったスタイルに口笛の1つでも吹き、同性であればその美しさに溜息を漏らしただろう。

そしてその芸術品の様に整った肢体の持ち主……篋唯衣・帝国斯衛軍中尉は自身がそんな美しさの持ち主である自覚など殆ど持たぬまま手早く全身から水滴をバスタオルで拭いとった。

「ふう……」

長旅直後のシャワーで積もった垢と疲労感をさっぱりと洗い落とせた事に満足した唯衣は、丈の短いバスタオルを巻いただけというあられもない姿のままベッド傍へと歩み寄る。

小さな棚の上に置かれていたのは読みかけの資料——XFJ計画に関わる主な衛士に関する情報だ。

丁度開かれていたページにはユウヤの写真。それを改めて穴が空きそうなほど見つめた唯衣は、やがて溜息を吐きだす。

「この男が——……」

今後のX F J計画、そしてひいては日本帝国の戦況の今後の行く末を決めるかもしれない存在だと考えると、唯衣の背中にズシリと今から重荷が押し掛かってくる。

しかもユウヤだけではない。いや、むしろユウヤと共に米軍から派遣されてきた『彼ら』の存在こそが、真に運命を握っていると言い換えても良いかもしれない。

唯衣の意識は数時間前の出来事・・・・・・・・ユウヤとアルゴス小隊の間で行われた対人演習へと遡る。

演習の一部始終を記録・見物する為の指揮車両に『彼ら』がやってきたのは唯衣よりも後だった。

彼らはアルゴス小隊の前任中尉であるイブラヒム・ドゥール中尉と共に、さっきまでブリーフィングルームに出向いていたからだ。

「シルバーフィールド中佐、紹介しましょう。彼女が『X F J計画』における日本側の開発主任であるユイ・タカムラ中尉です」

「帝国斯衛軍所属、篁唯衣中尉であります！」

「合衆国陸軍所属、ゼロス・シルバーフィールド中佐だ。よろしく頼む」

定規と分度器で測ったかのような完璧な角度の敬礼をしてみせた唯衣にゼロスも一応きつちりとした答礼を返す。

次にゼロスの取った行動に唯衣はその意味をすぐに理解できず反応が遅れた。

あまりに自然過ぎて差し出された手が握手を求めていると悟るまで数秒の間。我に返って泡を食いつつ彼女はその手を握る。

「個人的には長い付き合いを続けていきたいと思ってるから、よろしく頼むぜ」

「は、はあ」

「んでこっちがリベリオン・テストロッサとユーノ・スクライア。俺の長年の相棒と戦友で階級はそれぞれ大尉と中尉な。特務、がつくけど」

「よろしく願いますね、篁中尉」

「よろしくね、篁中尉」

「ユーノだけか？砂糖とミルクはどうする？」

「角砂糖3つ。ミルクは抜きでお願い」

これまた普通に『大尉』が注文を出して『中佐』がさっさと自ら彼に手渡すその光景に堪らず眩暈ががが。

様子からして彼らは立場を超えたずっと長い立場なのだからそれでいいのだろう、と唯衣は半ば無理矢理納得する事にした。自分だつて巖谷の叔父様と似たようなものなんだし。

「・・・そろそろ始まるようすな」

空々しく呟かれたイブラヒムの言葉に、唯衣は慌てて液晶ウィンドウに向き直る。

イタリア、スウェーデン、ネパール———BETAによって国土の奪還を目指す国々から選ばれた者ばかりなだけに、対人演習中のアルゴス小隊の面々の機動はどれも目を見張るものがあった。

一方、件の米軍から派遣されてきた衛士、ユウヤ・ブリッジスの動きはというと悪くはない。むしろ実戦経験の無い身でありながら他の3名と拮抗した腕前と言って良い。

なのに別のウィンドウに表示されている当の本人の表情は苦虫を噛み潰したような様子で……これは動揺、だろうか？

意識せずマイクに拾われた独り言が指揮車両内にも響く。

『クソ、OSが古いのに戻っただけなのにこれだけトロク感じるのかよ……！』

「何だって？」

ユウヤの発言に心当たりがある唯衣はゼロス達の方に目を向けた。リラックスした様子だが、そこからは今の部下の言葉に対する感想を何も読み取らせてくれない。

画面の中で事態が動きだしたのでまた視線をウィンドウへ。ヴァレリオの操るF-15E<ストライク・イーグル>が同じくユウヤのF-15Eと接敵。

ユウヤの仕掛けたスモークから見事な操作で離脱するのと入れ替わりに、タリサの操るF-15・ACTV（元はドゥール中尉の機体でユウヤに宛がわれる筈だったが搭乗経験の差からユウヤ本人が入れ替えを希望した）、が頭上からユウヤに襲いかかる。

ユウヤの反撃によりタリサは突撃砲を失うが、ビルを足場にして飛

び跳ねるといふ機動で機体そのものへの被弾を免れてみせる。

そして始まるドッグファイト。ビルの谷間を部隊にユウヤが逃げ、タリサが追いかけるという格好。

『待ちやがれー！』

『こんな時にっ！』

逐一届く操作ログからはユウヤが弾切れになった背部兵装担架の突撃砲を切り離そうとした事を示しているが、代わりに動作不良によるエラーが表示されていた。

しかしユウヤには大した動揺や焦りは見られない。むしろ何かを待ち侘びるかのように、

『狙ってるんだろ、そうだ、そのまま追ってこい……………』

前方にコンサートホールが迫る。スピードを御し切れず手前で曲がらなければ建物に激突、しかし減速すれば撃墜が待つチキンレース。

ここぞとばかりにACTVが備える4発の大出力エンジンが本領を発揮し、F-15Eのいわゆる後方危険円錐域を取ると短刀をその手に装備。曲がる為に減速しようとするれば即座に襲いかかる気満々なのが見え見えである。

もはや建物は目前。ここだ、と直感したタリサは一旦上昇してから急降下。前方のF-15Eへと一気に飛びかかった。

『もらったあああああ——！！！！』

——だが予想は覆される。

F-15Eは殆ど減速しなかった。

『うおおおおおおっ！！』

跳躍ユニットは斜め下を向くと一瞬だけ爆発的に推力を発生させ、機体を斜め上へと急激に押し上げる。タイミングを合わせられ、ACTVの短刀は地面だけを傷つけ根元から折れる。

傍から見ていた唯衣は、ユウヤが引けに引けず減速の代わりに自爆を選んだのかと驚愕したが、それも違う。

F-15Eの主脚が持ち上がり、コンサートホールの壁面を蹴った。衝撃を主脚で受け止め跳躍ユニットを細かく噴かす事で打ち消す。

操縦桿を握る手の動きはまだ止まらない。壁面を更に数度蹴り上がりながら、主脚を思い切り振り上げさせた。

次の瞬間、操作された脚部の遠心力によってぐるん！とF-15Eの上下が反転。180度逆転した所で、向きを変えないまま再度跳躍ユニットに火が入る。

逆上がりと三角飛びを組み合わせた様なアクロバットにより、宙返りしながらタリサの頭上を飛び越えるという形で文字通り彼女の上に行く。ACTVの頭上を越える際、片手に保持していた突撃銃から模擬弾をばら撒くというおまけつきで。

ちなみに120mmの方に装填されていたのはキャニスター弾。発射後即炸裂する様設定であつたので、ACTVの頭上に狙い通りまんべんなく中身を降り注いでみせた。

「何iiiiiiiiっ!?!」

タリサの絶叫と共に、機体のでっぺんから肩部装甲の上半分が見事なまでに黄色に染まる。

『————アルゴス2、頭部・両肩部大破認定。状況終了』

イブラヒムの終了通告は、タリサにとってはあまりに無情であつた。抗議の雄叫びを上げるタリサを余所に、1人ごちたユウヤのその内

容は、

『・・・こちらもつとおつかないのに散々追っかけまわされてきたんだ。自慢にはならないがな』

それを聞いて小さく笑いを漏らしたのはリベリオンとユーノ。

何笑ってやがる、と言いながらも自覚したようにそっぽを向くゼロスの反応がまた、何処か軍人離れした気安い雰囲気だった。

「ああいったのもまたこの国^{アメリカ}独特の人間関係を示しているという事なのか・・・？」

ブツブツと口に漏らしながら、アルゴス小隊の経歴書の下に隠れていた別のレポートを手取る。表紙には部外秘のハンコ。

今日を通していたのは各軍に問い合わせる事で簡単に手に入れる事

が出来た『表』の書類だが、こちらは帝国情報省、つまり自国の諜報機関がまとめた調査資料である。

調査対象はゼロス・シルバーフィールド、並びにリベリオン・テストロッサとユーノ・スクライア。

———中身の方といえば、半分ぐらいは『表』の方と大差無い。

父親は元日本帝国の駐在武官で現アメリカ合衆国大統領。母親は不明。

彼は優秀な成績で訓練校を卒業後、本人の希望で極東への派遣部隊に参加……。直後、98年夏のBETA日本上陸の際、撤退命令を無視して部隊の仲間と共に出撃。

近隣の帝国軍部隊と共闘ししばらく戦線を支えたものの、結果は彼を残して全滅。彼もまた重傷を負い、何らかの理由から昏睡状態のまま本国へ送り返されたとされている。

次に目覚めたのは99年明星作戦が発動した時期。今の彼の副官である2人、リベリオンとユーノの名前が確認されるようになったのもこの時期からだ。正確には、『それ以前からの2人の痕跡は確認できない』。

両名とも欧州からの難民を経てリベリオンは民間で技術者兼テストパイロット、ユーノは他多数の難民同様軍隊に所属し衛士としての才能を開花させ、そこをゼロスに一本釣りされた———と調査書

には載っている。

成程、難民出身なのであれば表に出る以前の足跡が確認出来ない点も納得はいく。イギリスを除いたBETAによる欧州占領の混乱は2人のような存在を多数生みだしたのだから。日本国内でも同様の事例は少ない。

しかし、と唯衣は思い返す。

あの3人の雰囲気は階級や立場の壁など存在しない、明らかに友人・
・・・否、それ以上の結びつきが3人にあるようにしか唯衣には見えなかった。

それこそ高々1～2年程度では足りない。長年共に歩んできたかのような――――

「・・・そこまで推測するのは私の役目ではないな」

アルゴス小隊の面子同様、あのユウヤを除く米軍からの3人も実戦経験を有している。軍隊入りが遅いリベリオンとユーノもルーキーからは程遠く・・・なにより戦った場所が普通とは違う。

2000年後半になって、ゼロスは2人と共にイギリスはドーバー基地へ。当時リベリオンが所属する企業で開発されたF-15の改良型2種の実戦テストを行う為だ。

数度のH12・リヨンハイヴから侵攻してくるBETAの『間引き』を経て彼らが直面したのは――突然の大規模侵攻。

不意を突かれ、次々と部隊が脱落しされど敵の数が減らない地獄の中、彼らはたった3機で驚異的な戦果を上げ、大量のBETAを陽動し、撃破された他の戦術機の兵装さえ利用しながら傷ついた他部隊の最後の1機が撤退するまで戦い抜いたという。

その戦いぶりは遠く離れた日本にまで伝わった程だ。アメリカも自国が生んだそれも現大統領の息子だけあって大々的に宣伝だってしていたし、助けられた部隊の中に英国のとある王家にも名を連ねる高名な出の衛士も含まれていたとかで、その辺りもまた一部では話題だった覚えが唯衣にはある。

……乗っていた戦術機が弾切れ燃料切れで小型種に取りつかれて壊されてからも今度は強化外骨格も用いず『生身で』更に撃破数を増やし続けた、という話は流石に眉唾ものだったが。

でも助けられた分助けようと再出撃した名家のお嬢様達が目撃者だのしっかりログにも映像に記録されてただの何だのかんだの云々。

「とりあえずは相当な武人でもあるという事なのだろうな」

そういう事にしよう、うん。

ともかくその戦いにおいてそれぞれが生き残った者達から異名を与えられるまでの活躍を試みせたのは紛れもない事実だ。

ゼロスはパーソナルカラーの黒とまさしく鬼の如き戦いぶりから『鉄の鬼神』。

ユーノはどんな状況からでも正確に射抜く技量から『魔弾の射手』。

リベリオンは重火力仕様の改良機を操り悉く無慈悲にBETAを爆砕していった事を指して『劫火の魔女』。

帰国後今度は合衆国軍でも有数の戦術機開発の場で有数とされるネバダ州グルームレイク基地にしばらく滞在。そこで一本釣りされたのが、

「ユウヤ・ブリッジス・・・」

あの模擬戦を見る限りでは、彼もまたアルゴス小隊に負けるとも劣らぬ技量であるというのは理解出来た。こちらに来る前の対BETA／対戦術機演習、双方ともトップの成績を修めていると経歴書にもある。

それでもやはり不安が残る。本当に彼は使い物になるのかと。戦術機の運用の仕方のでんで違う異国の、それもよりにもよってアメリカの衛士に満足に足る結果を出せるのかと。

—————自分は彼を本当に御してみせれるのか。不安と緊張が脳

裏を過ぎる。

「違う、そうじゃない。私が御してみせなければならぬのだ！」

それに、唯衣の任務は単にXFJ計画での日本側からの調整役のみに止まらない。

XFJ計画のそもその発端……帝国軍次期戦術機選定において不知火の改良型の開発が大筋として進められていた最中、突如待ったをかけて割り込んできたのがリベリオンが開発主任として籍を置くバニングス・インダストリーズである。

彼らが不知火改修の件で既に帝国軍と手を組んでいたボーニング社を押しつけるようにして形で売り込んできたのは、F-15の新型改修機2種類。

第3世代機にも劣らない機動力と近接戦闘能力を備えたF-15E X<アサルト・イーグル>と、攻撃機クラスの火力と格闘戦も可能な最低限の機動力を両立したF/A-15<ブラスト・イーグル>。

その他既存の戦術機でも簡単に運用可能且つ高い効果を期待できる各種新兵器、そして従来の戦術機の機動が過去の物にしてしまう驚異的な性能と操作性を戦術機に与える新型OS<EX-OPS>。

どれも米軍では一部で採用されたばかりの新型であり、しかも既に実戦で能力は証明済み——彼らはそれを、帝国にも売ると言ってきたのだ。他でもない、非公式ながら大統領のお墨付きで。

唯衣のもう1つの任務は、それらが採用に足るかどうかの選定をこのユーコン基地で行う事。

これは先方からの提案で、各国から厳選された衛士達で新たな試験部隊を作って新装備のテストを行い、各国の機体との相性を確かめてから最終的に他の国々が自国に採用可否を決めるという計画である。

提案そのものは強引かつ一方的に進められた物ではあったが、世界最大戦力の国の最高指導者が背後に居ては無碍にする訳には到底行かず。

先方からもしっかり最終的な決定権はちゃんと自分達にあると認めてくれただけまだマシだろう。その辺りはかの国にしては珍しい、と思われたのは日頃の行いのせいかな。それを知ってどっかの大統領は思わず苦笑したという。

送られてきたそれらの資料映像の効果も大きい。映像を見た途端、大抵の人間が映像に釘付けになる結果となった。唯衣自身もそうだったのだ。

そうして幾つかの要因が重なった結果、唯衣は2つの重大な任務を帯びてこのアラスカの地に降り立ったのである。X F J計画に賭けていたボーニング社からしてみれば二股をかけられたも同然で憤懣

極まらないだろうが、日本もまた形振り構ってられないのが現状である。

というかボーニング社も裏ではかなり強引に計画を推し進めていたがぶっちゃけバンニングス社もどっこいどっこいだったりする。

情報省の調査書によると、敵対する企業の一部がスキャンダルに見舞われたり時には経営者が唐突に病死・事故死した結果、バンニングス社が得をしたこの数年事例が不思議なほど多い。かの企業も中々後暗い部分がありそうだ。

この選考計画に参加する国は帝国以外にはソ連・ネパール・スウェーデン・イタリア・トルコ・イギリス。

イギリス側の人員とは後日合流予定で、ゼロス達3人は当初から開発・運用に携わってきた立場としての教導役としてやってきた。X FJ計画における試験演習の合間合間にユウヤも教える側として加わるという。

つまりユウヤは唯衣の部下としてテストパイロットを務める傍ら、教導役としてユウヤが唯衣に教えるという複雑な立場になってしまうのだ。より一層人間関係に注意せねばならないだろう。

堪らず溜息が出てしまうほどに気が重い。

さて、それらの情報を予め手にしてはいたが、実際に本人達に会ってみると、その――色々な意味で予想通りだったり、また違ったりして戸惑ってしまった。

佐官でありながら気軽に部下の分までコーヒーを用意してしまう気さくな上官。傷さえ隠せば歌舞伎の女形も立派に努めれそうな柔らかな美貌の青年。軍服でも隠しきれないどころかまた別種の淫靡ささえ放ってしまうスタイルと小悪魔的な雰囲気を持ち主の美女。

正直人目を引くというか、濃過ぎる。ハルトウィック大佐の執務室に訪れて顔を合わせたユウヤがこちらに対し敵意を向けてきた時はむしろ逆にホッとしてしまったぐらいだ。

ここでの日々は間違いなく一筋縄ではいかない、と早々に悟る。早くも遠く離れた故郷の巖谷中佐に連絡を取りたい衝動に駆られてすぐに自戒。

いけないいけない、これからだというのに今からこんな気持ちでどうする私。

頭を振り、これからまずしなければならぬ事を脳内で整理し、そして出した結論は。

「・・・・・・・・とにかく明日はまず日用品を揃えに行こう」

もう良い時間帯だし、時差ボケをさっさと解消する為にも今日はおう就寝する事にしたのだった。

TE編3…イーニア・シェスチナの邂逅と最後の来訪者

ユーコン基地に所属する者達や家族が暮らす為に造られた都市であるリルフォートは、唯依にとっては珍しい物ばかりで満ち溢れる場所だった。

道はくまなく整備され、豊富な物資が店頭に並び、行き交う人々が笑い合っている。

そのどれもが、今の日本帝国には滅多に見られない光景。

日用品を買いにリルフォートを訪れた唯依は自分が今目にしている光景とこれまで故郷で目の当たりしてきた風景との落差を今後の糧にすべく脳裏に焼きつけながらも、これからの自分が達成すべき課題に想いを馳せ――――

思考に没頭し過ぎて周囲に気が回らず、結果他の通行人にぶつかってしまふ。

「あっ！」

「ん？」

「おや？」

衝撃で前のめりに転んでしまったらしい少女が唯依を不思議そうに見上げていた。

「ご、ごめんね！大丈夫？怪我は……」

長い銀髪で無垢な瞳の美少女。慌てて立ち上がらせようと手を差し伸べ、ふと自分以外にも少女に手を伸ばしている人間の存在に気付く。

考え事に加えて私服姿なので気付かなかったが、相手は昨日顔を会わせたばかりの不思議な上官だった。その隣には同じく私服姿の副官の女性の姿も。

「し、シルバーフィールド中佐！？」

「何だ、笹か。奇遇だなこんな所で。そっちも買い物か？」

「は、はい！日用品を購入しようと思ひまして！」

「そこまでカチンコチンにならなくてもいいですよ、笹中尉。相棒はそこら辺殆ど気にしませんから。ねえ相棒？」

「いえ大尉、ですが・・・」

階級も付けず気軽な様子でかけてきたリベリオンの言葉にゼロスも同意する。

「そうそう、俺も堅っ苦しいのはどうも苦手だし、今はオフなんだから無礼講でかまわねーさ」

「しかし――」

くきゅうくきゅう

小動物の泣き声にも似た可愛らしい音色に言葉は途切れ、次いで発生源の銀髪の少女に一同の視線が集まった。

「・・・・・・・・まずは腹ごしらえしないか？」

「ハイ・・・・・・・・」

無性に気恥しくなって、真っ赤な顔の唯依はゼロスの顔を直視する事が出来なかった。

――少女の目が、リベリオンにじっと固定されているのも気付

か
ず
に。
。

T
E
ー
3
..
邂逅と最後の来訪者

それから10分後の現在。

人々の憩いの場となっている公園のテーブルの一角で、唯依はクレープ片手に固まっていた。彼女はクレープという食べ物物の存在自体知らなかったのである。

「食わねえのか？それとも他の物の方が良かったんなら悪かったな」

「いえその違います！別にそういうつもりじゃないんですが！」

「毒も入ってませんよ？」

「いやですから！」

自分も豪快にクレープに齧りつきながら余計な冗談を口にしたリベリオンの頭を軽くはたくゼロス。

その反対側にはイーニアが美味しそうに小さい口で自分の分にパクパク食らいついてみせていた。席の配置は丸いテーブルを中心にゼロスと唯依、リベリオンとイーニアがそれぞれ向かい合う形となっている。

唯依は唯依で、初遭遇の食べ物に忌避感半分興味半分。でも上官が自腹を切って買ってくれた物だったりするし、何より鼻をくすぐるフルーツと甘味の香りが……

ええいままよ、と一口。

そして、

「~~~~~!!?!?!?」

目を白黒させめぐるしく表情を変える。唯依を良く知る彼女の副官や叔父がこの場に居たら微笑ましくも愉快そうに生温かい視線を送っていたに違いない。実際リベリオンが似たような感じだった。

「どうです、悪くないでしょう?」

「は、はい」

2口目。今度はじっくり味わうように咀嚼し何度も頷いてから、やがて口元が小さく笑みを形作った。

その時カシャリ、と奇妙な音がすぐ傍で鳴った。まるでカメラのシャッター音を電子的に合成したような音。

我に返って発生元を確認してみると、何やら手鏡大のプラスチック

の小箱みたいな物を持ったりベリオンの姿。上の端の部分にレンズらしき物が内蔵されていて、唯依に向けられている。

「うん、良い絵が取れました。ユウヤやヴィンス辺りに見せたら喜びますよ」

「撮ったんですか、撮ったんですね！？お願いですから消して下さい後生ですのぞ！」

「（別にそんな情報端末で撮影しなくても普通に記憶領域にしっかり保存してんだらうに）」

「（良いじゃないですか。これもまた風情つてもんですよ相棒）」

「（まあお前だし、今更な話か）」

あわあわと顔を赤くし日頃の厳格さもかなぐり捨て、リベリオンから携帯端末を奪おうとする唯依を軽くあしらいつつも声にも顔にも出さず目すら合わせないまま会話を交わす上官と部下。

「とりあえず篋、口元。クリーム付いてんぞ」

「あうっ！？」

一層顔を火照らせ口元をゴシゴシと拭うその姿を見、ゼロスはどう思う————これもまたギャップ萌えってヤツかねえ。

そしてイーニアがクレープを楽しむ手を止め、自分とリベリオンをじっと見つめている事にふと気付く。

「俺らにも何か付いてるのか？」

「・・・ううん。なんでもないよ」

そうは言うものの、少女の目線はしきりにリベリオンに向けられるのがバレバレである。

誤魔化すようにワザとらしく唯依は咳払いをすると、

「ところで、中佐と大尉もお買い物ですか？」

「ああ、細々とした物を色々とな。ま、とっくに一段落してコイツ（リベリオン）と一緒にこの街を見て回ろうとしてたところだったんだけど」

「基地の中になれっきとした街がある此処と違って、グルームレイクは1番近くの街まで100kmは離れてる上に周りには荒野と砂漠しかありませんでしたからね。こういうのは本当に久しぶりなんですよ」

どうも奇遇にも唯依と殆ど同じ目的だったようだ。彼らもやって来たばかりなのだから長期滞在する以上買い出しは必須であろう。

残りの面々も交互に休暇を取って買い出しに出るとの事。

「篁中尉も買い物を？」

「はい。私の方も既に粗方終わった所で」

しばし考える素振りを見せてから、徐に笑みを浮かべたりベリオンはこう提案する。

「なら中尉も一緒に街を見て回りましょうよ。せっかくばったり出くわしたんですし、今後共にやっていく仲間同士の交流といきましよう」

「ええっ！？で、ですが・・・」

「あー、悪いが諦めろ。こういう時のコイツはブツ叩いても止まらない。俺も交流を深める事自体は賛成だしな」

大いに戸惑うが、元の所属は違えど上官からの誘いを無碍にする程度の凶太さは唯依は持ち合せておらず。

「貴女も一緒にどうです？」

「・・・うん。イーニアもいいよ」

何故か銀髪の少女も参加決定———ところで少女の名前はイーニアというらしい。

結局優秀な軍人であっても人付き合いそのものに関しては柔軟性に欠ける唯依は、リベリオンの勢いのままリルフォート観光に雪崩れ込まれる羽目に陥るのだった。

「それにしても中々良い品揃えっぷりだなこの店」

「中佐はご自分で料理をなされるんですか？」

「ぶっちゃけ基地の食堂の飯より自分で作った方がよっぽど美味い」

「イギリスほどじゃありませんけどこの国も味付けもかなり大雑把ですからねえ……」

「そうなのですか……しかし米軍では未だに天然物の食材を用いてると聞いていますが」

「材料の問題じゃねえんだよ。材料よりも調理の仕方と味付けが肝心なんだよ。つーか醤油と味噌と白米も恋しくてしかたねーんだよ……」

「ゼロス、ないてるの？」

「泣いてんじゃねーやい。これは単なる心の汗だっ・・・！」

「（・・・？彼女、今中佐の名前を）」

「チクショー、せめて部屋に自前の冷蔵庫とキッチンさえあればっ
！」

「無い物ねだりしてもどうにもなりませんって相棒」

「—————そうだ筆！そっちの伝手で米と醤油と味噌こっちに送
って貰えねーか！？」

「ええっ！？」

「一応軍人なんだしこれが当たり前だと分かっちゃいるんだけどな
あ・・・」

「やはり湯船にのんびり浸かりたいですか？基地にはシャワーしか
ありませんからね」

「市井の者達の中には満足に風呂にも入れない者も多数存在するの
ですから、今の我々にはそれだけでも十分贅沢だと思います」

「それも理解してるけど、な。やっぱり1度慣れ親しんでると、な」

「あ、これイーニアがつかってるのといっしょだよ」

「（シャンプーハット・・・）」

「（微笑ましいですね）」

「？」

「やはり絵本1つとっても帝国とは大分作風が違うものばかりですね」

「でも日本だってグ○ム童話ぐらいは伝わってんだろ？」

「はい。そちらは童謡と並んで日本でも一般に広がっています」

「ゼロス、これは？」

「ああ勝手に離れちゃダメ——んなあっ！！？」

「・・・とりあえず、今すぐその本は元の所戻そうな？それは大人向けの本だから」

「イーニアはこどもじゃないよ？」

「と、とにかくダメよその本は！貴女にはまだ早過ぎるの！」

「そして何さりげなくレジに持ってこうしてるかそこおー！」

「いえ、ヴィンス達のお土産と今後の資料を兼ねて」

「何の資料なんですか一体!!」

そうして騒がしくもあちこちを転々とした4人がやがて辿り着いたのは、

「あ・・・・・・・・」

不意に唯依が立ち止まる。彼女の眼はショーウィンドウに並んだカジュアルな服を捉えて放さない。まるで目当てのおもちゃの虜になった子供そっくりだった。

そんな様子の唯依を見、それからまずゼロスとりベリオンは顔を見合わせ、次いでイーニアとも視線を交わし。

直後、素早く両横に立ったゼロスとりベリオンによってガツシリと両腕を固定される段になって、ようやく唯依は我に帰る。

そのまま唯依はそのショーウィンドウが並ぶ店の中に引きずり込まれていった。おまけとばかりにイーニアにまでコートの裾を引っ張られながら。

「すみません、彼女に店先に置いてあったあの服を。それから幾らか適当に見繕ってあげて下さい」

「なななな大尉！？わ、私は結構です！このような場所であんな服など！」

「きつとにあうとおもうよ？」

「言ったら、こうなった時のコイツには勝てないって」

「OK！ワタシはりきっちゃいマスよー！」

「張り切らないでー！」

最早涙目になりながらも結局上官に刃向かえぬままノリのいい服屋の店員まで加わってミニファッションショー開始。

まずは例のカジュアルファッションから。口では否定的な事ばかり漏らしていた唯依ではあったが、内心惹かれていた服を身に付ける事が出来て、思わず頬が緩んでしまう。

着替えさせた張本人のリベリオンと共犯のイーニア&店員は楽しそうに笑い、溜息を吐きつつもいざという時は実力行使で主にリベリオンを止めに入るつもりだったゼロスまで感心した様子だ。

「やっぱり美人は何着ても似合うもんだよな」

「そ、そうですか・・・ありがとうございます」

もじもじと恥ずかしそうに身を振らせながらも、ゼロスの褒め言葉に心なしか嬉しそうな様子の唯依。

・・・慣れない状況に頭が熱暴走しかけなせいで、しっかりとカジュアル姿を撮影されている事に気づいていない。

「ホラお客様、こういうのもドーですかー!」

「きゃっ、そんな強引に、って此処で脱がさないで!？」

「私達も負けてられませんね。イーニアもお着替えしてみますか？」

「・・・うん、いいよ」

数分後、そこには今度はチャイナ服姿にさせられた唯依と同じく着替えたりベリオンとイーニアの姿が!

「つてきぐるみかよ!？」

「あ、可愛い・・・お持ち帰り――はっ!? そ、それよりた、た、た、大尉は何なのですかその破廉恥な格好は!？」

「ミーシャとおそろいの」

「実用的なメイド服ですけど何か？」

「とりあえず本場のメイドに謝ってこい。何処が実用的だ一体」

ふわふわもこもこした焦げ茶の素材で出来たきぐるみ？（実際はパジャマらしい）に何故か熊耳付きのカチューシャまで装備したイーニアはまだいい。普通に『可愛らしい』の範疇だ。少なくともどこぞの雛見沢在住の少女の因果が流れこんじゃう程度には。

対してリベリオンはというと、そもそも何でこんな一般向けの服屋にこんな物置いてあんだとゼロスが叫びたくなるぐらい過激なメイド服————らしき格好だった。

下着が普通に見えるぐらい短いスカートって意味あるのか。上のシヤもボタンが少なくて胸思いつきり見えてるし、カチューシャぐらいしかメイドっぽさ残ってないだろこれ。

これには流石の唯依も苦言を呈し、

「幾らなんでも破廉恥過ぎます！」

「おや、箠中尉の姿も中々男心を擽る格好だと思えますが」

「~~~~~！」

確かに深く切り込まれたスリットとか、布地がくり抜かれている胸

元とか、そもそもぴっちりと身体に張り付くデザインなせいで平均以上のサイズの胸の膨らみが強調されている事に今更ながら思い至る。

この場で唯一の異性であるゼロスを見る。頬を掻きながら少し気まぐすそうに目を逸らされる。頭に血が上る。主に羞恥的な意味で。

「わ、私達軍人に相応しい格好という者はもっと実用的な——」

「実用的？OK，ワカリマシタ！」

「え？」

ギラン！と（唯依にとって）不吉に輝くは店員の目。唯依の知覚外で女性店員の両手が稲妻と化す。

「速い！？」

「ぶふおっ！？」

「見えたっ！」

唯依が驚愕しゼロスが噴いてリベリオンは撮影機能を高速連射。

2秒前までチャイナドレス姿だった筈の唯依は下着姿と化していた。それも元から彼女を包んでいた自前の物ではなく、隠すべき部分が

何処もかしこも透けた過激な一品へ。

・・・一体どうやって着せたのだろう？ゼロスの目ですら追い切れなかったのだが。

「だったらコレが1番ヨ！」

「なななこれは……すすすすすす透けているぞ!？」

「実用的と言ったらコレしかないデシヨ？ホラ、あそこの殿方も貴女のセクシーなダイナマイトボディにクリティカルしてマスヨ！」

「んなあつ!!!?」

もう一度ゼロスの方をしてみる。今度は目元を隠すようにしながら、
 またも顔を逸らされた。微妙に顔も赤い。

「・・・刺激が強いのは否定しねえよ」

そこが性的な話題への耐性が鍛えられていない唯依の限界だった。

[illegible]

涙声混じりの悲鳴と怒号と破壊音が交錯する。

「ううううう……巖谷の叔父様、私はもうお嫁にいけないかもしれませんが……」

「大丈夫。その時は相棒に責任を取ってもらえばいいですからはぶっ」

「なぐにほざいてやがるかこの元凶。そういう所自重しろつつてんだろコラ」

容赦なくゼロスに頭を小脇に抱えられて締め上げられるリベリオンだが、ちっとも堪えた様子はない。

疲れた様子で溜息をついてから、ゼロスは無造作に伸ばした手をさ

つきからうなだれっぱなしの唯依の頭に乗せた。

伝わってくる体温と節々が固い指先の感触に顔を上げ、それからようやく自分が今置かれている状況に気付く。こんな事をされたのは幼少期でも殆ど覚えが無いというのに、何故か不快感は湧いてこない。

「慰めにもならねえだろうが、犬に噛まれたとでも思っ着我慢してくれや。それにしても綺麗な髪だよなー。触ってても気持ちいいし」

「はあ、ありがとうございます・・・」

異性、それもアメリカ人に女の命同然の髪を触れられていると理解していても拒絶する気にはならなかった。むしろ出会って間もない上官相手にこんな事をされている事への戸惑いの念が大きくてそこまで反応できない、というべきか。

しかし彼に他意はなさそうではあるし、指の動きも柔らかで優しく、今日1日振り回されて疲弊した唯依の心が癒やされていくのを実感した。

ふと、彼女は思う。

最後にこんな風にして、現在の自国や世界の情勢を思い煩う事無く享楽を――楽しむ時を過ごしたのは、どれだけ前だったのかと。

「ユイ？」

先程の服屋で唯一購入した熊をあしらった防止を頭に乗せたイーニアが唯依の顔を覗きこんでくる。

何故イーニアが唯依の名前を知っているのか、それに気付かないまま茜色に染まり出した空を見上げながら、ポツポツと言葉を紡ぎ出した。

「・・・中佐、大尉。私達は本当にこんな事をしていて、よろしいのでしょうか？ BETAに蹂躪された国土には、満足に着る物もなく飢えを凌ぐのに精一杯な民が溢れているというのに・・・」

「そんなもん、仮にBETAがいようがいまいが必ずどこかにそんな場所が存在するに決まってるさ。少なくとも人が存在する限りは、な」

「ですが私は、私達は軍人です。そのような私達が、このような平安と享樂に浸るなど許されないのではないのでしょうか！」

権力者の息子には徴兵を拒否する権限が与えられ、それを行使する者が殆どであるの憂いるべき現状だ。

唯依は違う。そもそも武家は国の為民の為戦う事が当たり前であるし、合衆国大統領の息子であるゼロスもまたその現状に憂いているのでは――――

「ならそういう事なんだろうよ。少なくとも、お前の中ではな。別にそうやって堅っ苦しく生きるのもそっちの勝手さ」

だが彼は唯依とは違う。ある意味純粹で、ある意味無知な彼女はゼロスの本質をまだ知らない。

「俺達は俺達の目的の為に、だから軍に所属する事に決めた。俺はな顔も知らない人間を守る為だとか、愛国心だとか、そんな何処にでもあるような綺麗事なんざどうでもいいんだよ」

「っ！なら、何故貴方は戦うのですか！！」

「なもん決まってる。自分が満足する為さ」

「――！！！」

急に不快感に襲われ、唯依は弾かれたように立ち上がる。今すぐこの場から去りたい衝動に駆られるがまま離れようとする。

「待って下さい、篁中尉」

「何でしょうか、テストロッサ大尉」

しかし軍人としての性か、一応上官であるリベリオンに止められ反射的に足を止めてしまう。

「すみません。しかし相棒の事を勘違いされたままだとこれからの事に影響しそうでしたから」

「・・・何を仰りたいのでしょうか」

「確かに相棒は自分勝手ですが「ほっとけ!」、だからといって待ち受けている未来から目を逸らすような大馬鹿者でも、沈む船からそれを他の乗客に知らせないままさっさと逃げ出すような卑怯者でも断じてありません」

「・・・?」

「要はですね、相棒にとって大切な人間というのは極少数ではあっても、その少数の人間を守る為であれば相棒は世界を救ってみせし世界を敵に廻しても勝利してみせる―――そういう人間だつて事なんです。そしてこの世界にも相棒が守りたいと思っている存在は幾つもあります。つまり・・・」

「中佐はその為に戦っている、と?」

「そういう事です。でしょ、相棒?」

話を向けられた本人は頭を抱えて悶絶中だった。

「だーっ！ハズい！ハズいんだよ！んなカッコつけた意思表示とか自分以外の口から聞かされたら滅茶苦茶きついぞ！？何だよこの羞恥プレイ！」

「おや、昔はしょっちゅう『世界も敵に廻してやる（キリッ）』なんてアリサとかに言ってますでしたっけ？」

「殺せー！誰か俺を殺せー！！」

「（ところで『ハズい』とはどういう意味なのだろう・・・？）」

そんな事を思ってしまう程度には唯依の毒気は抜けさせられたようである。

「でもま、別に軍人だからってバカ騒ぎしたり遊んだりってのが許されないってのもおかしい話だと俺は思うぜ？人間たまに息抜きしなきゃ、いつかは溜め込み過ぎて一気に潰れたりするのはよくあるからな。実際似たようなの見た事あるし」

「そう、でしょうか」

「そうですよ。それに見える物、感じる物は場所によって様々ですから、そうやって自分を含めて色々な事を改めて確認するには遊びもまた必要だと私は思いますよ」

巖谷中佐を相手にしている時にも似た、年季と経験を感じさせる2人の言葉が唯依の心に沁み入る。

唯依は改めて今この場に広がる風景をしっかりと見回してみた。泣いている子供を慰める両親。怒る恋人を宥める男性。聞こえてくる笑い声。

唯依は頭ではなく魂で理解した。こういった活気に満ちた場所こそが、本来人が生きるべき姿なのだ。彼らが浮かべるような笑顔を取り戻す事こそが自分達の役目なのだ。

それを実現する為にも。それを達成する為にも、今から悩んで立ち止まってる場合ではない。

「ありがとうございます、中佐、大尉。自分がこれからどうしていくべきなのかが理解できました」

「いえいえ、別にお礼を言われるほどの事ではありませんよ。単なるおせっかいも同然ですし……」

「……………どうして、なの？」

声をかけられて、イーニアもまた立ち上がってまっすぐ視線を向けてきていた事にようやく気付いた。

「どうしてゼロスもリベリオンもそんなにじゆうなの？イーニアといっしょで、2人もたたかうためにうまれたのに」

「イーニア？一体何を言ってるの？」

彼女の言葉の意味が理解できない。2人がイーニアと一緒に？戦う為に生まれた？

一方、問われた側の2人はただ首を竦めてみせ、唐突に問われた内容に対し決して戸惑った様子も見せず、むしろ笑ってすらみせた。

それも的外れな事を言われて嘲笑う訳でもなく、むしろ逆に言葉の意味をしっかりと理解し、肯定の意味すら覗かせた清々しいまでの笑みで、

「知りたいですか、イーニア・シエスチナ少尉？」

「えっ、彼女も軍属なのですか？」

「そうですよ。イーダル試験小隊所属、彼女もまた篁中尉と共に訓練を受ける予定の1人です」

こんな幼い少女が。いや、帝国も今では16歳以上の少年少女も徴兵の対象なのだからおかしくはない。

ただ外見が、というよりもイーニアの放つ雰囲気をもっと幼い子供にしか思えなかったのだ。

「まあ、別にこっちも大層な事じゃないんだけどな」

「中佐？」

「ねえ、どうして？」

再度イーニアが問いかける。何処となく瞳は揺れ、声にも震えが混じっているよ気がした。

ゼロスは立てた親指で自身の胸元を示し、ハッキリと言い放つ。

「俺はただテメエで考え、テメエで悩んで、そしてテメエで決めただけだ。テメエがどう生き、どんな存在であろうとするのかを、な」

「たたかうためにうまれたのに？」

「生まれも育ちも境遇も知った事か。テメエの生き方なんざテメエ

で決めてナンボじゃねえか」

「……いーにあにはわからないや」

「何時かはそんな時が来るさ—————そんな時は、イーニアが後悔しない答えを選べると良いな」

叔父様が自分に向けるものとよく似た、父性に満ち溢れた眼差し。彼も立ち上がり、軽くイーニアの頭もポンポンと撫でると、「じゃあまた明日な」と手を振りながら離れていく。

「本当に大切な事は自分で決めてこそ人間ですよ」

リベリオンもそう言うってから彼の後を追いかける。半ば呆然となつて唯依が2人の後ろ姿を見つめている間に何時の間にかやらイーニアも消えてしまっていて、1人唯依はベンチに取り残されていた。

「貴方達は………一体何者なんだ？」

唯依の呟きは届かない。

同時刻…リルフォートより北、輸送機用滑走路にて

「此処がアラスカかあ・・・やっぱりドーバーとは空気からして違うと思わない？」

「そんな事より迎えは何処なのよ。せっかくわざわざイギリスから来てあげたっていうのに」

オリーブドラブの布地に砂色のシャツとネクタイと、いささか地味な色合いの軍服に身を包みそんな会話を交わす女性が2人。

悪戯っぽい愛嬌も含んだ美しさもさる事ながら、周囲で各々の仕事

を行っている者達（特に男性陣）の注目を引く理由は、髪型が違えど2人が全く同じ顔をしている事にある。

彼女達は一卵性の双子であった。同じ産湯に浸かり、同じ時を過ごし、同じ部隊で戦ってきた。部隊におけるポジションまでは違うが、双子故の前衛・後衛を互いに補う抜群のコンビネーションで名を馳せている。

彼女達の出自と戦歴を考えればもつと目立つ――悪く言えば装飾過剰な――特注の軍服を纏っていてもおかしくないのだが、それは彼女達自身が良しとしていない。

例えばイギリス王家の血を引いていようと、戦場では1人の兵士として戦う事に決めているのだから。

・・・ただし、服務規定違反に引っ掛かりそうなレベルでスカートの丈を切ってさりげなく際どくしているのは、まあご愛嬌という事で。

と、ようやくお待ちかねの迎えの車がやってきた。運転しているのは2人も知った顔だった。

「待たせたね。もう半年ぶりになるかな」

「やっほーユーノ、そっちはアンタの部下？」

「そうだよ、こっちに戻ってから見つけた逸材さ」

「合衆国陸軍所属、ユウヤ・ブリッジス少尉であります」

ユウヤの敬礼に2人は小悪魔の笑みを浮かべたまま、折り目正しい答礼を返す。

「英国陸軍より派遣されましたリーゼロッテ・グレアム」

「並びにリーゼアリア・グレアム」

「「両少尉、現時刻をもってアウトロー特別試験部隊に着任いたします」」

「遙々ようこそ2人共。部隊は君達を歓迎するよ」

――いよいよ物語が動き出す。

TE編4: Meet the players (前書き)

次回更新から完全新作となります。

TE編4: Meet the players

少し早く来すぎたか、とユウヤは思っていたが、ブリーフィングルームには既に先客が居た。

銀の少女が2人。背丈やスタイルの差はあれど姉妹のように2人は似ていた。大きいショートカットの方は冷徹な視線を一瞬だけユウヤに向けたただだが、小柄な長い髪の少女の方はにこやかに笑ってユウヤに向けて手を振った。余りにも子供っぽい無邪気な笑顔は軍人とは思えない。

だがチラリと見えたウィングマークと所属を示す肩章からソ連軍の衛士であるのは丸分かりだった。人は見かけによらないものなのだと再認識。

「(ま、チヨビも似たようなもんか。アレは流石に喧し過ぎるけど)

」

現在部屋に居るのはユウヤ含めこの3人だけ。銀色の内小さい方とはかく、大きい方は明らかにお喋りの相手をしてくれそうな相手とは思えない。

他の連中もすぐにやってきそうにないと感じたユウヤは懷から携帯端末を取り出した。

数秒後、特徴的な電子音のメロディーが流れだし————何故か銀の少女達が反応した。ユウヤは知らなかったが、その音楽はロシアの民謡なのである。

音量は控えめにしていたのだが物音1つしなかった室内では意外と大きく響き、電子的な音楽と効果音を聞きつけたのかしきりに2人がユウヤの方を気にしだす。端末の画面に視線を落としているユウヤは気付いていない。

しばらくしてからふとユウヤが顔を上げると、何時の間にやら小さい方の少女が目の前まで近づいて同じように画面を覗き込んでいた。思わずのけ反ってしまう。

「……………なにをしてるの？」

「何って……………暇潰しのゲームだよ」

「げーむ？」

「まあ知らないよな。テ○リスってパズルみたいなゲームなんだけど」

「？」

不思議そうなあどけない表情だが視線は一時停止された画面に釘づけである。

と、鼻を鳴らす音が届いた。もう1人の大きい方の少女がユウヤに

あからさまな侮蔑の嘲笑を向けていた。続いて呟かれたロシア語の意味は分からないがロクな内容ではあるまい。

こういう感情を向けられるのは生まれと見た目のせいでそれなりに慣れっこなつもりだったがやはり気に入らない。とはいえあの少女が向ける敵意はむしろソ連とアメリカがかつて敵対関係にあった国同士だったからこそそのものだろう。

……流石のゼロスも今回ばかりは上手くやれるのやら不安になってくる。信頼は、しているが。

考え事をしていたせいで目の前の少女の行動を見逃してしまっていた。彼女が行動を終えた段になってようやく我に返り、状況を把握する。そして慌てる。

「うおっ!？」

「んなっ、イーニア!？」

少女―名はイーニアらしい―がどういうつもりかユウヤの膝の上に腰を下ろしていた。小さくも引き締まったお尻の感触がズボンの布地越しに伝わってくる。

「何だよ一体!？」

「イーニア、早くその男から離れなさい!」

「ユウヤ、つづき、しないの？」

イーニアだけが呑気にそんな事をのたまう。ユウヤはいきなりの彼女の行動にどう反応すべきなのか思い浮かばず固まり、もう1人の少女の方は今にもユウヤに掴みかかりそうな般若の形相だった。と
いうか実際そうした。

「き、貴様あ！この低俗な快樂主義者が！一体イーニアに何をした！
！どうやって誑かした！」

「お、俺は何もしてない！お前もすぐ傍で見てただろうが！」

「クリスカ、ユウヤは悪くないよ？」

イーニアの声もクリスカには届いていない。怒りの形相で顔を近づけてきたクリスカから反射的に離れようとユウヤが背もたれに背中を押しつけた。更に迫ろうと銃身をユウヤの方へ駆けるクリスカ。

さて、必要以上に重心が偏るとどうなるか？

後ろへ傾いて不安定な状態にあったパイプ椅子の角度は遂に限界を超え、一気に後方へと倒れ込む。

ブリーフィングルームの扉が開くのとけたたましい転倒音が鳴り響くのは同時だった。

「いてててて………」

顎を引いて後頭部を強かに打ちつけるのは防げたユウヤだったが、代わりに腹にのしかかる少女2人分の体重をもろに受けてしまい圧迫感と鈍痛に襲われる。

少女達の身体をどかして文句を言ってやろうと、ユウヤは銀色の髪に視界を覆われながらも手探りで両手を動かしたその時。

むにゅう

「ふぁん」

ぽよん

「ひうつ!？」

この柔らかい2種類の感触は何だろうか。ヒュウ、と誰かが口笛を吹いた。

「ユウヤ、もっとやさしくもんでほしいな?」

何ですと?

慌てて身体を重みの下から引きずり出し身体を起こす————イーニアとクリスカが胸元を押さえていた。イーニアはやはりぽわぽわした風だがクリスカは真っ赤な顔でもはや親の敵を見るような強烈

な眼差しでユウヤを射抜いてくる。

もしかして、もしかしなくてももしかするんだろうか。

「やるじゃねえのトップガン。まさか『紅の姉妹』の胸を2人纏めて揉むなんてな」

「女の子の扱いはもっとソフトにしてあげなきゃダメよ？」

「こ、こんんんんおお変態！女の敵かよテメエエエエエエ！！」

「ご、誤解だ誤解！」

言い訳も空しく、ゼロス達がやって来るまでユウヤはタリサとクリスカにボコボコニされたとき。

余談ながらこの時の共闘（？）がきっかけで不倶戴天の敵対関係にあったタリサとクリスカの関係がちょっとだけ近づいたのかなんとか。

最終的に集まったのはユウヤを含め13名。席にはイブラヒムを含

T
E
-
4
..
M
e
e
t

t
h
e

p
l
a
y
e
r
s

めたアルゴス小隊の面々にイーニアとクリスカ、先日別個に顔を合わせた唯依とグレアム姉妹、そしてゼロスとユーノとリベリオンが壇上に立っていた。全員BDU姿である。

「……………って感じでそれぞれ元の所属毎に持ち寄った自前の機体を使って同じ新装備を試験運用してもらう訳だが、整備は1ヶ所に纏めて行ってもらう。各機のデータを共有する許可も貰ってあるから、自分とこの以外の機体データが気になる奴は遠慮なく聞いてくれ」

それはつまり未だ試作段階にあるタリサのACTVやイーニアとクリスカが操るSu-37の実機データも自由に見れるという事だ。自分の機体に愛着のあるタリサやクリスカは何か言いたげにゼロスを睨みつけたが当人には気にした様子はちっとも無い。

「説明はこんな所だ。そんじゃま次は自己紹介といこうかね。初めて顔を合わす奴も居るこったし」

「それじゃあ前の座席順に順番に名前と所属を言って下さい」

そう告げたりベリオンは最も近くの席に収まっていたクリスカとイーニアを見た。

「……………ソビエト陸軍少尉、クリスカ・ビャーチェノワ」

「おなじく、いーにあ・しえすちなしようです」

ぶっきらぼうな口調のクリスカの後方で密かに中指を立てるジェスチャーを向けていたタリサだったが、イブラヒムから無言でゲンコツを叩き込まれて涙目になった。

次はソ連組と反対側に陣取っていた双子が立ち上がる。

「イギリス陸軍所属、リーゼアリア・グレアム少尉」

「同じくイギリス陸軍所属、リーゼロッテ・グレアム少尉。これから皆よろしくね？」

双子の内、ショートカットの方が悪戯っぽい笑みを部屋中に振りまいてみせた。中々の美人なので、女好きなヴァレリオが微かに口笛を鳴らしてみせる。

ユウヤは2人の事を猫っぽいと感じた。血統書付きの双子だが性格は澄ました感じのタイプと人懐っこくやんちゃなタイプ、といった感じで別々っぽい。実際その通りだった。

壇上の3人の視線が双子の後ろに座る唯依に向けられる。

「日本帝国斯衛軍中尉、篁唯衣であります！」

彼女を見ているとユウヤの胸中がざわめく。ゼロス達と触れ合うようになってから自身の中に流れる日本人の血、そして自分達家族を捨てた父親への憎しみが転じて育まれた日本という国へ抱いていた嫌悪感は大分和らいだ（というよりどうでも良くなった）が、苦いものが浮かんでくる辺りまだまだ根は深そうだ。

こうなってくるとピシリと折り目正しく分度器で測った化のような完璧な敬礼をしてみせるあの姿さえも無性に腹立たしくなってしまう。思考を包もうとする黒い靄を振り払おうとユウヤは頭を振った。

「次はアルゴス小隊の面々だ。この5人と篁中尉には新装備の試験運用とは別にXFJ計画も手掛けてもらってる」

「――アメリカ陸軍所属、ユウヤ・ブリッジス少尉であります」

「ネパール陸軍所属、タリサ・マナンダル少尉であります！」

「イタリア軍所属、ヴァレリオ・ジアコーザ少尉でありますっ」と

「スウェーデン軍所属、ステラ・ブレイメル少尉であります」

「トルコ陸軍所属、イブラヒム・ドゥール中尉だ」

複数の視線の内、唯依の視線が特に強くユウヤを見据えている。負けじとばかりにユウヤもまた強く唯依を見つめた。睨みつけている、と表現した方が正しい位の険しい目つきだった。

「（見てろよ、その澄ましたツラの度肝を抜かせてやる）」

そして注目は壇上に戻る。

「それじゃあまずは私から行きますね。リベリオン・テストロッサといいます。合衆国陸軍特務大尉であり、今回貴方達に試験してもらう各装備の開発者でもあります。装備に関して意見や質問があれば遠慮無く私に聞きに來ても構いませんよ」

アメリカ組以外がどよめきを漏らす。ウイングマークを付けているのでリベリオンもまた衛士の1人である事は一目で分かっただろうが新装備の開発者でもある事は意外だったらしい。

次に1歩前に出たのはユーノ。相変わらずのアルカイツクスマイルを浮かべたまま口を開く。

「僕はユーノ・スクライア。所属はユウヤリベリオンと一緒にアメリカ陸軍の特務中尉ね。皆とは仲良くやっていければと思ってるよ」

————ふと気付く。ソ連組の様子がおかしい。ユーノから距離を取ろうとしているのかしきりに身体を椅子の上で動かしていて、イーニアなど少し怯えてさえいる様子だった。

前に聞いた事がある。ユーノの笑顔は別に意識して浮かべているの

ではなく、過去にロクでもない経験をしたせいで張り付いて戻らなくなってしまうた表情だと。

「最後は俺だな。俺はゼロス・シルバーフィールド。アメリカ陸軍の中佐で今回の運用試験の責任者って事になっている」

おもむろにゼロスは無言になった。上官のいきなりの沈黙にミーティングルームの空気が次第に張り詰めていく。

たっぷり十数秒間を空けた後、

「ま、中佐なんて階級も半分コネとインチキでなったようなもんだから気楽に接してくれや。俺も堅っ苦しいの嫌いだし、最低限の礼儀位守ってくれりゃ充分だから」

いやちよつと待て色々とおかしくないかそれ。コネとインチキで中佐になったとか自分で白状する事じゃないだろ絶対。ほらみろタカムラなんかずっこけてるぞ。

最初の印象はかつて家に飾られていた日本人形そっくりな無機質感を唯依に対してユウヤは抱いていたのだが、ハトが豆鉄砲食らったような有り様の今の様子を見ているとそんな感覚もどっかへ飛んでいってしまったのを自覚した。

まあゼロスが相手なら仕方ない。仕方ないったら仕方ない。だって自分も被害者だし。

「んじゃ簡単に自己紹介が終わった所で早速始めるとしよう——
—全員強化装備に着替えてシミュレータールームに集合。全員の腕
をまとめて見せてもらうぞ」

ユーコン基地に於いてはシミュレーターを使った演習というのはむしろ珍しい部類に入る。

この基地では対BETA戦を想定した演習ではJIVES（統合仮想情報演習）システムを用いた実機演習が一般的なのだが、機体が整備で使えない場合などではやはりシミュレーターが用いられる。各国からの兵が集められているだけあって他の基地と比べて利用されにくいシミュレーターであってもかなりの数が揃えられていた。

各々がダウンロードされた自身の乗機をシミュレーターで操る光景をユウヤは真剣な目でモニターで観察していた。その隣にはゼロス達も居る。見学組の内ユウヤだけ強化装備姿で残りの3人はBDUのままだ。

現在の演習はヴォールク・データ……ハイヴにおける攻略演習である。

彼らは何度も繰り返してきた演習プログラムを行っていた――――
――ただし、各自『単騎』で攻略という設定で。

シミュレーターでハイヴ攻略真っ最中の衛士達の顔に余裕はない。そもそもハイヴ突入など最低でも中隊規模、いや大隊規模でも全く足りないぐらいなのに自分1人（ソ連組だけ2人1組）だけで攻略してみせるなんて注文、出鱈目にも程がある。ユウヤも同意見だ。半分ぐらいは。

「テストパイロットに選ばれただけあってどいつもそれなりの腕、
って訳か」

演習の感想が口から漏れる。ベテランでも1機だけで背部突入なんて状況ではそのBETAの濁流の前に『死の8分間』すら超えれず撃破されてもおかしくないが、既に1時間経った現在も未だ誰1人撃墜されていない。

特に複座型Su-37を操るクリスカとイーニアなど上層部を突破し、中層に達しようかという勢いだ。撃破したBETAの数も他と

比べ際立ってはいた、が。

「そろそろですかね」

「だろうな。もうすぐ何人かやられる頃だ」

ゼロスの発言通り、S-11の自爆ボタンが押され演習終了を示すアイコンが表示された。

まずはヴァレリオ、次にステラ。リーゼアリアも脱落したりサも墜ちる。イブラヒムにやや遅れて唯依とリーゼロッテが同じタイミン
グで撃破認定、最後にクリスカ・イーニアコンビが中層始め辺りで
遂にBETAに囲まれて身動きが取れなくなり自爆。

大半が機体に搭載していた弾薬をほぼ使い切り、近接戦用長刀を積
んでいた唯依やリーゼロッテも使い物にならなくなるレベルまで得
物を酷使していたとデータには残っている。

結局誰も反応炉に到達できないまま全滅という結果だったが、誰も
がこれが当たり前の結末だと考えていた。むしろ自分だけでここま
で攻略できたと思って満足そうにしている者すら居た。主にたりさ
とかタリサとかクリスカとか。

「で、ご感想は？」と言いたげな視線を送ってくる衛士達は少な
らずそれなりのリアクションを期待していた。クリスカに至っては
最も優秀なのはこの私達だなんて、勝ち誇った瞳が口ほどに内心を
語っている。

だがしかし、ゼロス達の反応はとても素っ気ない。

「……………ま、こんなもんだろ」

「ええ、以上に皆さん優秀ではありますね」

「うおい！何だよ、それだけかよ！？」

「ちよび、うるさい。キャンキャンほえないで」

毒吐くイーニアに噛みつかんばかりに詰め寄ろうとしたタリサを堂々と宥めるステラ。喧騒を余所にイブラヒムが代表者として問いかける。

「失礼ながら中佐、この演習はどういった目的で行わせたのでしょうか」

「理由は幾つかある。純粹に皆の技量を知るにはこのやり方が1番分かりやすかったってのもあるし、皆がどう考えて戦ってるのかを理解したかったってのもある」

「それで、中佐達のお眼鏡に俺達は適ったんでしょーか？」

ヴァレリオの軽口にリベリオンが男好きのする蠱惑的な笑みでもって答える。

「皆さんの技量はかなりのレベルにあると思いますけど、それでもハイヴを攻略するには不十分ではあります。ではそれは何が原因なのでしょうね？」

「それはやはり我々がまだまだ未熟だから、でしょうか……」

「うん、それはちよつと違うね。腕は十分だよ。ただここが足りないのさ」

ユーノが微笑みを張りつかせながら人差し指でトントンと叩いてみせたのは頭。オツムの足りない馬鹿扱いされたような気がして唯依の内心は惘然となる。

「つーわけで出番だぞ、ユウヤ」

「いや何で俺なんだよ。ここは上官が自分の実力を部下に教え込む場面だろ普通」

「貴女の操縦が1番癖が無くて見本にピッタリなんですよ。相棒達じゃ癖が強過ぎて参考になりませんし」

「自分はどうなんだよ自分は!？」

「私は戦域管制を行う役目がありますので。という訳で上官命令ですので大人しく従って下さいね」

「チクショウ！分かったよやれば良いんだろやれば！！」

もはや上官と部下というよりは学級委員長に仕事を押しつけられた不良生徒みたいなやり取りである。

「あの列の1番奥のシミュレーターを使って下さい。設定と中身の書き換えは完了してあります。機体は何時も通り強襲掃討仕様のF-15Eで構いませんね？」

「ああ、それでいい」

シミュレーターが閉じる寸前、ゼロスがこう付け加えた。

「何なら最速記録を1分更新ごとにビール1杯奢りってのはどうだ？」

「1杯じゃなくて1本にしろ！」

「OK、クリアできなかったら罰ゲームな！」

「何なのだこれは……」

唯依の呻きはまさしく他の衛士達の内心と一致していた。どいつもこいつも驚愕を顔中に張り付けていて、ロットとアリアのグレアム姉妹だけはそこまで驚いてはいないものの視線はモニターに釘づけになっている。

画面の中のユウヤが操るF-15Eは、文字通り縦横無尽にハイヴ内を動き回っている。射撃回数は驚くほど少なく、着地する際着地点に群がっているBETAの掃討か頭上から降ってきてぶつかりそうな個体を撃ち落とす時ぐらい。

とつくに中層に突入し、ソ連組が打ち立てた先程の最高記録をあっさり塗り替えて見せたユウヤは更に仮想空間に再現された地中内の敵地を跳躍ユニットと主脚を用いて駆け抜けていく。

進むにつれ現れるBETAの規模は数万体にも膨れ上がってユウヤに立ち塞がる。しかしユウヤはちっとも焦った様子も見せずただ辟易としながらも両手の突撃砲を乱射。機体を横抗の片方へ寄っていくとBETAの軍勢はユウヤの動きに釣られ、もう片方の壁が薄くなる。それでも数千体は犇めいていた。

跳躍ユニットの出力を全開にし急転換。薄くなった方へ機体の矛先を変えると躊躇い無く突っ込む。見物している側からしてみれば角

度が急過ぎる上にあの速度では壁に激突すると誰もが思った場面だったが

『そうらよっ!』

三角飛びの要領でBETAの雨の隙間を潜り抜けると危なげなく着地。動きを止めず更に奥へ。

ありえない、と一同は思った。あのタイミングでは入力しても機体の反応が間に合わず、あえなく壁に激突して墜落している筈だ。

機体そのものは高性能ではあるが至って普通の量産機であるF-15E以外の何物ではない。唯依達の疑問は、リーゼアリアとゼロス達の会話によって氷解する事になる。

「ねえゼロス。あの機体に積んであるのって、やっぱりあの例のOSなんでしょ?」

「ご名答です。2人は既に見た事がありますからすぐに分かりましたね」

「忘れられる訳無いわよー。最初に見た時どれだけ驚いたと思っているのさ。なんてったって光線級のレーザーまでひよいひよい避けちゃうんだもの」

『何ィ!?』

一同、騒然。落ち着いた物腰のステラまで口元を押さえて目を見開いてしまうほど。始めて話を聞かされた中で唯一落ち着いていたのは「そーなんだ、すごいねクリスカ」なんて発言を素直に受け止めてみせているイーニアぐらいだ。どちらかといえばどれだけ突飛な事なのかちゃんと理解していない感じにも見えなくもないけれど。

「別に照射のタイミングは分かるんだから寸前で軌道変えりゃいいだけの話なんだがな、実際の所」

「口で言うのは簡単ですけど、現実にはそれを実現できるだけの処理速度を持ったOSと完璧に作動させれるだけの機能を持ったハードウェアがあればこそその話ですよ」

「それを実現させたのがリベリオンが開発した新型の戦術機用機動制御ユニット―――＜EX―OPS＞さ。今ユウヤが操作してあるシミュレーターにもそれが組み込んであるんだよ」

ユウヤの操る機体の動きはとにかく止まらない。動いて動いて動いて動いて、BETAに取りつかれる猶予を与えずさっさと醜悪な魔の手から逃れてしまう。

集められた者達全員、それなり以上の腕を持つという自負があった。けど今は、今まで積み上げられてきた自信と実績が胸の内で音を立てて崩れて行くのを誰もが自覚していた。

何て事だ。この野生の獣のように疾走する戦術機の姿を見ると、自分達の操縦はまるで関節が錆ついたよぼよぼの爺さん並みに鈍く

思えてくるではないか。

そうこうしている間にも遂にユウヤはハイヴ下層へと突入してしまい、一際規模を増したBETAの濁流に怯む事無く突貫していく。

『まだまだあ！』

両手と左右背部マウントの突撃砲の120mmを4門同時発射。装填されていたキャニスター弾が36mmの同時連射を遥かに超える密度の散弾を前方へ放ち、BETAの壁に穴が開く。即座に埋まりつつある唯一の突破口に機体を滑り込ませ再度跳躍ユニットを全開。

——突破した先に要塞級の巨体が立ち塞がる。ユウヤの顔に焦燥が浮かぶが思考は要塞級をかわす道筋を探し、手足はそれを実行に移すべく目まぐるしく働いてみせる。

左右？NO、他のBETAでぎっしりだ。上？ダメだ、こちらも天井から降ってくるBETAの数が多過ぎてすり抜けるのは困難過ぎる。立ち止まる？馬鹿言うな。

前へ、前へ、前へ。それがハイヴ戦の、何より兵士の鉄則。動きを止めたら比喻でも何でもなく戦車級にたかれて喰われてしまう。突撃級に轢き殺される。要塞級に殴り潰される。要塞級の触手に溶かされ光線級のレーザーに焼き貫かれる。

そうなりたくなきゃ身体を、頭を、フル回転させ続けろ———それがゼロス達に叩き込まれた教え。

———だから、前へ！

『うあああああああつ！！』

リミッター解除。乗り手に限界以上のGが加わらないよう設定されている跳躍ユニットの安全装置はシミュレーターでも忠実に再現されていて、その鎖から解き放たれたF-15Eは更に加速した。

無茶な機動に身体が振り回されるのも慣れっこにさせられてしまったユウヤの身体は通常以上にのしかかるGもものともせず機体を操り続ける。機体の高度を下げ地面ギリギリまで這いつくばるようなコースを選択。

戦術機の全高は平均して18～19m前後。要塞級は全高だけで50mオーバー。先細りの10本の脚部と触手を修めた尾節、それに三胴構造の胴体で構成されている。

ユウヤは肩からねじ込むようにして要塞級の脚部と尾節の間に機体を潜り込ませた。脚先と胴体との間には十分な空間があったのだ。通り抜けざま、置き土産とばかりに要塞級の弱点である三胴接合部に36mm弾を叩き込む。

要塞級のトンネルから突破したユウヤの後方で自重に耐え切れなく

なった要塞級が横倒しに崩れ落ちる。巻き添えで周辺に居た小型種が多数下敷きになっていたがユウヤが気にする筈も無い。

そこまで来てユウヤもリミッターをかけ直す。解除していたのは現実には僅か数秒足らずだったのだが操作していた本人にとってはその数倍にも感じられたし、顔にも大粒の汗が多く浮かんでいた。

しかし、その甲斐はあったと言える。

「—————反応炉到達を確認。目標達成です。お疲れさまでした」

シミュレーターから出てきたユウヤをまず出迎えたのは……
歓喜の余り突撃してきたタリサのボディプレスだった。

TE編4: Meet the players (後書き)

感想お待ちしております。

TE編5..彼と彼女の事情(前書き)

お待たせしました、新作です。

・・・書き方忘れて無茶苦茶になってるような気ががが

TE編5..彼と彼女の事情

「(・・・・・・・・またかよ)」

『それ』に気づいた時、強化装備姿のユウヤは吐き捨てるかのよう
にそんな感想を抱くしかなかった。

日本人のハーフという生まれが原因で味わってきた様々な不愉快な
過去に起因するのか、気づけばユウヤは周囲からの視線に敏感にな
っていた。

周囲から浴びる視線の内、大体は好意的には些か程遠い感情孕みの
物ばかり。

だが最近感じる視線に含まれているのは、嫌悪や侮蔑といった負の
感情というよりは興味や戸惑いが多く含まれている・・・・・・・・気が
する。

でもってそんな熱い(?)視線を送ってくる正体が誰なのか、見当
がついているからこそユウヤの内心をかき乱す。

これが他の人間からなら平然と受け止めるなり無視するなり出来た
だろう。

あの日本からやって来た、いかにも『日本人は偉いのだ』と言いたげないけ好かない女でなければ。

「（言いたい事があるんならさっさと言えってんだ）」

最初に顔を合わせた頃からそうだ。同じ空間に立ち会う度、無意識なのかそれとも違うのかは知らないが、気づけば頻りに彼女は自分に物言いたげな目つきを送るようにしていた。

それだけでも不愉快なのに、よりにもよって訓練機——TSF・TYPE-97・＜吹雪＞に乗って東側との合同テスト参加しろと仰せつかられては、ユウヤの心は余計にささくれ立つのを抑えきれない。

「（見てやがれ、その澄ました顔に吠え面かせてやる）」

あの日本人形野郎の言いなりになるのは気に食わないが、もちろん軍人である以上命令通りには従うつもりだ。

———その上であの女の予想を超えた結果を残して驚かせてや

る。

そう固く誓い、ユウヤはヴィンセントががきっちり調整してくれたであろう機体の元へ向かう。

その姿を見送った唯依はヴィンセントと細かな機体調整について議論を交わしだしたユウヤの様子を一しきり眺めてからおもむろに大きな溜息を吐き出した。

誰も自分の姿を見ていないと思い込んでの行動だったがそれは間違っている。

「何やってるんですか？ さっきから」

「ひゃわあっ!？」

突然背後から浴びせられた声に唯依は思わず飛び上がる。奇声を聞きたつたユウヤとヴィンセントが訝しげにこちらを見やるのにも気づかず、唯依は犯人が誰かを確認しようと勢いよく振り向き。

「て、テストロッサ大尉！？失礼しました！」

「そこまで固くなる必要はありませんよ。それでどうしたんです？さっきからまるで恋する少女みたいにユウヤに熱い視線を送っちゃって」

雪の様に白い唯依の頬が瞬時に赤く染まった。

「そそそそんなつもりは！誰が恋する乙女ですか誰が！」

「ほう、乙女ではないと？なるほど、このご時世いつ死ぬか分からないのですからさっさと貞操を捨てる気持ちも分からなくはないですね」

「そういう意味ではありません！私はまだ接吻すら行った事もありません！」

ハンガー中に響きかねない音量で叫んでしまった事に思い至った頃には時すでに遅し。

「……少なくともユウヤとヴィンセントの所にはしっかり聞こえたようである。」「聞いたかユウヤ今の」「またからかってんのかあの人」とのやり取りは更に真っ赤になった唯依の耳には届きはしなかったが。

いっその事リベリオンに掴みかかりってもおかしくないくらいの剣幕で唯依は抗議の眼差しを向けた。

「た〜い〜い〜!」

「ふっふっふ、けれど実際半分ぐらひはそんな感じでしたよ? あれだけ気にしていればユウヤの方も既に気づいているでしょうね」

「う、そ、そうでしょうか」

表情は常日頃から張り付けている凜としたものに取り繕おうと試みつつも、完全には隠しきれずちらちらと落胆や気恥ずかしさが見え隠れする唯依の様子にリベリオンは生温かい目を浮かべてしまうのを抑えきれない。

意外と顔に出やすいんですねこの娘、と感想を抱きながら言葉を重ねる。

「—————で。何でそんなにユウヤに注目しているのか教えてくださいませんか? もちろん貴女が良ければでよろしいですよ」

TE-5 .. 彼と彼女の事情

さて、困ったのは唯依の方である。

所属はどうあれ相手が上官である以上、世間話レベルの会話とはいえ下手にはぐらかす訳にもいかないのだが、さりとして上手く煙に巻くだけの弁術や器用さ、それを実行に移せるような性根を持ち合わせていないのが篁唯依という少女なのであった。

だからといって正直に白状するのも躊躇われる。内容的にも、立場的にも。

唯依は、どうやらユウヤが自分個人に対して良い印象を持っていない事に気付いていた。

だからと言って、それを直接指摘し、問い詰める訳にもいかない理由があった。

「（『彼ら』はその事に気付いているのか？その上で放置しているとなれば・・・・・・）」

ユウヤはリベリオンやゼロス達の直属の部下である。そんな彼に詰問し、仮に騒動になるうものなら事態は単なる試験部隊内の問題に収まらない可能性だってあるのだ。

何故ならユウヤは日米間の合同計画において政治的に選ばれたテス

トパイロットであり、そして超大国の最高指導者の息子の部下という立場なのだ。

「（もし私がブリッジスに詰問し、それがシルバーフィールド中佐の耳に入って彼が出てこようものなら、最悪XFJ計画に混乱をきたすかもしれない）」

部下が他国の軍人に些細な事で叱責された事に許容できず、それを
大国の方針を決定する張本人に知らせた結果外交問題に発展――――

そんな事態は断固として阻止せねば。そう固く誓い彼に対しては最低限の接触に止めていたつもりだったのだが……

「（申し訳ありません巖谷の叔父様。唯依はまだまだ未熟なようです）」

自省したって今の状況が変わる筈が普通はないのだが、その時ユウヤの搭乗する＜吹雪＞がその巨体を動かすべく主機を起動させた唸り声が格納庫内に響きだす。周辺に居た整備兵達が踏みつぶされないように退避していく。

演習場に向かいだした機体が目的地にたどり着くまで少し時間がかかるが、唯依も演習の様子を逐一チェックするために移動しなければならなかった。

「そ、それでは失礼します！」

「言いたい事があるんでしたらいっそ正直にユウヤに告げてあげた方が良いでしょう。グダグダ引っ張り過ぎて余計に拗れるよりは余程マシでしょうからねー」

リベリオンのアドバイスを、速足で離れていく途中だった唯依には背中を受け止める事しか出来なかった。

「ふざけんなよ・・・！」

ユウヤは現在の状況に対し、怒りのこもった呻き声を堪らず漏らしてしまった。

それはJIVES（統合仮想情報演習システム）が想定した演習内容に対しての文句ではない。ハイヴから湧き出るBETAの封じ込

め。その想定そのものは散々シミュレータでもやって来た内容だ。

思い返せば、現実にはBETA相手の実戦は未経験なユウヤが現時点における敵勢力の規模―複合センサーの範囲内だけでも千単位。尚も増大中―を知らされても然程慌てなくなったのはゼロス達のシゴキがあったからこそだろう。

ぶっちゃけ思い出したくもない。訓練所の教官に散々日本人とのハーフである事を罵倒され続けた日々よりも嫌な思い出だ……。お陰でこれだけの技量と肝っ玉を手に入れる事が出来たのも認められないが。

ユウヤが文句をつけたいののはただ1つ。

「何なんだよこの機体は！ バランスが滅茶苦茶じゃねえか！」

無線が仲間内どころかCPまで筒抜けなのも忘れてユウヤはそう絶叫してしまった。

グルームレイクの中でも1、2位を争う凄腕だったユウヤは、これまで自分が乗ってきた機体の性能を遥かに超えるピーキーっぷりを発揮し出した練習機に早くも振り回されだしていた。

戦闘機動を開始した途端、いきなりバランスが崩れる。

主機出力が低く、その癖反応が鋭敏過ぎたり妙なブレが生じたりして跳躍ユニットを用いた機動を行うと更に不安定になる。

それらの理由により高速機動中の移動射撃時に至ってはFCS（射撃管制装置）のロックオンシステムによる照準補正でもカバーしきれない程、着弾がブレる。

高出力・射撃戦重視の米軍機に慣れ親しんできたユウヤにとっては、まるで対爆スーツを着込んだ状態で薄氷の上でタップダンスを踊っている気分だ。機体の何もかもがユウヤの命令を聞こうともしない。

それでもあらん限りの意地と類稀なる操縦技術を振り絞る事で撃墜判定から逃れてはいたものの、それは<吹雪>に振り回されるユウヤをフォローするタリサ・ヴァレリオ・ステラといったアルゴス小隊の面々により援護があつてこそ。

大体、この演習が開始されて5分も過ぎていない。

5分も経たない内に早くもユウヤは追い詰められつつあった。まともにも動けない自分が受け持つ方面から、小さな穴に流れ込む液体の様にBETAの群れが集まりつつあった。

「（落ち着け。もっと冷静になってコイツがどういう機体なのか読み取るんだ）」

ただでさえタリサ達古参連中に情けない姿を見せている上、何よりユウヤにとって我慢ならないのは――唯依もまたCPにてこの自分の無様な様子を見物している点だ。

先日顔を合わせたソ連軍の衛士、<紅の姉妹>ことクリスカとイーニアも別のエリアで似たような内容を行っているのだが、あの2人

よりも唯依に対してこんな姿を晒している事の方が非常に腹立たしくてならない。

「（慌てるんじゃない。いつも通り、今まで通りに機体と1つになってみせろ）」

全ての感覚に神経を集中させろ。どれだけレバーを動かせばどれだけ機体が反応するのか。どれだけペダルを踏み込めばどれだけ跳躍ユニットが機体を加速させるのか。どれだけ連射すればどれだけ照準がブレるのか。それら全てを読み取り、己のイメージを現実に反映させろ。

思考を切り替え、初めて自転車に乗る幼児の如き細心の注意を払って主機の唸り声を、急激な収縮によって電磁伸縮炭素体があげる悲鳴を、地面を踏み締めた脚部や突撃砲の反動を受け止める腕部の振動を、1つ1つの情報を脳裏に叩き込み、統括し、ユウヤが思い描く理想の機動を実行する前にはどうすべきかという解決策へと繁栄していく。

横っ飛びしながらの掃射の命中率が微妙に向上した。急旋回後の着地から次の機動を行うまでのタイムラグが0コンマ数秒早くなった。僅かな改善の兆しはどんどん累積していき、次第に周囲からもハッキリと目に映る形にまで昇華する。

『こちらアルゴス3。段々調子が乗ってきたじゃねーかヤンキー！』

「うるせえ！まだまだこれからだ！」

アルゴス3、ヴァレリオからの冷やかしにも強気に言い返すぐらいの余裕をユウヤが取り戻したその時。

『バカ、油断してんな！アルゴス1、チェックシックス！』

「!!?」

アルゴス2ことタリサの警告に従い機体を反転。視界中に数十の戦車級の群れと数体の要撃級の姿が飛び込んでくる。

いつの間にか自分の＜吹雪＞を取り囲もうとしていたBETAの群れを撃退しようと慌てて突撃砲を連射——しようとして警告音。36mmならびに120mm、双方共に弾切れ。

「（クソッ！素人じゃあるまいし!!）」

＜吹雪＞の癖を全身の感覚で読み取るのに気を裂き過ぎて網膜投影が映し出す残弾数の表示の確認を怠るなんて本末転倒だろうが俺。

ユウヤの技量を図る為と初めて乗る機体に慣らすのが目的の演習の為か、彼の＜吹雪＞の装備はやや変則的だった。手持ちの武器は日本で使用されている87式突撃砲が1丁。2ヶ所ある背部マウントに同じく87式突撃砲が1丁、そしてもう1つの背部マウントには

近接戦闘用の74式長刀が搭載されていた。

突撃砲の予備弾倉は既にゼロ。背部の突撃砲も残弾は心許無いし、後方への迎撃手段はまだ残しておきたい。

切羽詰まった状況でありながら即座に踏ん切りをつく事が出来ず、ユウヤは貴重な時間を失ってしまった。

『ユウヤ、何やってる！カタナを使い！』

タリサがそう荒々しく急かすほどに、ユウヤと要撃級との距離は危険な程に詰まりつつあった。

「・・・クソツタレめ」

そう吐き捨てる。目の前に迫った要撃級がサソリの針にも似た形状の凶悪な前肢を振り上げる。

背後から蹴り飛ばされるような衝撃。長刀を固定していた背部マウントのロッキングボルトが爆破され、その反動で自動的に頭上に持ち上げられた腕部マニピュレーターの間まで長刀を跳ね上げたのだ。

長刀の重さに振り回されて機体のバランスがまたも崩れる。長刀を構えたまま前のめりになって倒れ込みそうなく吹雪。そこへ要撃級がダイヤモンドすら超える高度の前肢を叩きつけようとするのを防ぐべく、アルゴス小隊の中でも射撃能力に定評のあるステラが援

護射撃を放とうと試みる。

結論から言えば、その必要は無かった。

『————えっ？』

＜吹雪＞の跳躍ユニットが吠えた。UN仕様の水色の機体が浮き上がったかと思えば、上半身の姿勢はそのままに前方へと鋭く跳躍を行った。

そのまま要撃級の頭上でくると1回転。判定の結果、要撃級は縦一文字に長刀によって撫で斬りにされたと評価されてキルカウント数1追加。

一部始終を目撃してしまったステラが間抜けな声を漏らしてしまうほどの曲芸機動。そして超反応。＜吹雪＞はそのまま危なげなく着地。

「刀は、嫌いなんだがな」

愚痴を吐き捨てながらユウヤはレバーとペダルを介して、機体に握

らせた長刀を振るわせた。

ゴルフスイングの様に足元目がけ救い上げるような軌道の斬撃。地面に線をなぞるかの様に足元に集っていた数体の戦車級が胴体から輪切りにされたと判定され、映像の中でしか存在しない血しぶきが舞う。

長刀を振り回した遠心力を敢えて抑え込むのではなく、その勢いのままユウヤは機体をその場で1回転させた。肩から先の位置を変えて今度は横薙ぎに一閃。横一文字に切り裂かれる別の要撃級。

動きは止まらない。クルクルとバレリーナ宜しく踊るようなステップを踏みながらユウヤは迫り来るBETAの一団へと<吹雪>を突っ込ませた。

<吹雪>が舞う度刃が閃く。胴体から両断される戦車級、尾節を根元から切り飛ばされる要撃級。時速100kmオーバーの突撃をマタドールみたくひらりと交わされたかと思えば、突撃級の脚部がまとめて切り落とされてバランスを崩し横転する。

闘士級や兵士級といった小型種に至っては、行きがけの駄賃とばかりに長刀で薙ぎ払われたり果てには爪先でまとめて蹴り飛ばされて文字通り粉碎される始末。

これが仮想演習でなければユウヤの<吹雪>はBETAの体液に塗れていたであろう。

『オイオイオイ、マジでやるじゃねえかヤンキー！日本人だけにカタナの扱いはお手の物ってか！？』

「俺は日本人じゃねえ！言ってる事が矛盾してるぞ！」

『背中は何せろアルゴス1。そのままどんどん化け物どもをサシミにして来いよ！』

「了解だアルゴス3！」

網膜投影された映像に仮想の鮮血の花を幾つも咲かせながら、ユウヤは再度新たに迫るBETAの団体に斬り込んでいった。

演習を終えて格納庫に帰還し、吹雪の cockpit から出てきたユウヤを最初に出迎えたのは、先に戻って来ていたタリサとヴァレリオからの痛烈な背中への平手打ちの連打であった。

合同テストの結果は最高の結果だったといっても過言ではないだろう。ユウヤ達アルゴス試験小隊は時間内に受け持ったエリア内の全BETAの掃討に成功してみせた。

長刀を携えたユウヤが押し寄せるBETAの大群に飛び込み一斬の元に次々BETAを斬り伏せつつも陽動を行い、無防備に晒された横っ腹や背中にヴァレリオやステラの射撃。途中からは野生の獣じみた勘と化け物じみた機動力を有するF-15・ACTVを限界まで振り回せるだけの腕を兼ね備えたタリサも加わって勢いは更に加速し、見事設定された数のBETAを全滅させきったのだった。

掃討までのタイムは＜紅の姉妹＞の方が速かったのだが、それはユウヤが最初に＜吹雪＞の操縦に戸惑った分撃破数が少なめだったからである。

「まさか最初は手抜きしてたんじゃないだろうな。ええ、トップガンさんよ？」

「んな訳ねーだろ。乗ってる機体がポンコツみたいな代物だっていうんならポンコツに相応しい操縦の仕方に切り替えただけだっての」

「実戦を知らねー癖にあの数の化け物相手にしてもそんなにビビッてなかったしな。中々見どころのある肝っ玉じゃねーか！」

「ハッ！あの程度の演習ぐらい散々やらされてきたっての！」

正確には『アイツら』がやって来てからあれ以上の内容をやらされてきたんだけどな、と内心付け足すユウヤ。そうとは知らず馬鹿笑いを浮かべてタリサとヴァレリオは彼の背中を連打連打。強化装備越しても結構痛いというか、衝撃で咽そうになる。

ステラの方は柔らかに微笑みながらこちらを生温かい目で眺めてき

ている——だけ。2人を止めてくれる気配は無し。ブー・タスお前もか。

「つかお前らどれだけ叩いてくんだよ！もう十分だろうが！」

「あー歓談中のところ悪いんだけど………お客さんが来てるぜ」

ヴィンセントがその場に加わって声をかけてきた。しかし微妙に引き攣った笑みなのが腑に落ちない。問題発生の気配。

彼が指差す先へと顔を向けると、格納庫に差し込む夕日を背負ったシルエットが目飛び込んできた。

顔が見えるぐらいの距離になると彼女に対する違和感に気付いた。人間味を抑え込んだような無機質なイメージをユウヤは日頃唯依に抱いていたつもりだったが、今の彼女はどことなく張りつめたというか、刺々しい感じを俄かに漂わせている。

「（俺が上手くやってみせたのが気に入らない、って辺りだろうなどうせ）」

よくある事だ。ユウヤにとっては忌々しい事に日本人である父親の遺伝的特徴を色濃く有しているせいか、右翼寄りの同僚や上官に目をつけられてはあれやこれやと難癖をつけられてきた経験を腐るほど積んできた過去から、唯依の異変もその類だろうとユウヤは捻く

れた推測を巡らせた。

彼女の様子が少しおかしい事はユウヤやヴィンセントだけでなく他のアルゴス小隊の面々も敏感に感じ取っていた。今は事態の推移を固唾を呑んで見守る事しか出来そうにない。ユウヤが地雷を踏み抜かないようにと切に願う。

「本日の結果……当初は乗り慣れない機体に戸惑っていたとはいえ、中々良い結果だったと言えるだろう」

「お褒め頂きありがとうございます、中尉殿」

たっぷりの皮肉を声色に乗せた返答。ヴィンセントがユウヤの背後であちやーと顔に手を当てた。

唯依の口元が僅かに引き攣ったのは目の錯覚か。

「……幾つか質問をさせてもらっても構わないか？」

「ええどうぞ、中尉殿」

「米軍では近接戦をさほど重視していないと耳にしているが、貴様は長刀を扱った経験があるのか？」

演習中にユウヤが行った長刀を用いた近接戦闘機動は弧や円を描くような、跳躍ユニットによる方向転換になるべく頼らず重量のある

長刀を振るった際の遠心力を最大限活かしたものであった。

無理矢理な機動変更や無駄な跳躍を抑え、最低限の動きを止めないまま確実にBETAに一太刀浴びせていくその戦法は、決して一朝一夕で身に着く技術ではない。

そのような戦い方をよりにもよって射撃戦重視の米軍―G弾が開発されてからというもののその傾向が顕著だ―が華麗に披露してみせたとなつては、流石の唯依も食いつかざるを得ない。

「……あいった戦い方を覚えたのは最近になってからですよ。今の上官が『どんな戦い方でも出来るようになっておいた方が良い』ってしごかれましてね」

「シルバーフィールド中佐にか」

「ええその通りです」

唯依は脳裏で資料を再現する。

ゼロス・シルバーフィールドの名実を世界に知らしめたイギリス・ドーバー海峡沿岸部周辺での壮絶な攻防戦において、彼は補給や損傷の為に撤退する他国の部隊を掩護するべく、文字通り鬼神の如く戦い抜いたのだという。

中でも大きな逸話の1つとしては、彼は弾切れになってからは戦場で先に撃破されてしまった他の機体の武装をその場で調達しながらも戦闘を継続したという物がある。

突撃砲などは通常マニピュレーターの表面から送られてくる信号を突撃砲内蔵の機器が受信する事で発射を行う（可動兵装担架に搭載されている状態で発射できるのもそれが理由だ）のだが、信号の受信不良などに備え従来の銃火器同様に引き金によって射撃ができるよう2重の機構が備わっている。

ゼロスが『現地調達』としては用いたのは火器のみではない。西ドイツ軍が採用したハルバード型の長刀BWS-8やイギリス軍の＜要塞級殺し＞の異名を持つ大剣BWS-3、フランス軍のフォルケイトソードといった長刀類を米軍の衛士でありながら躊躇いなくその場で用いて、まさに鬼神の如き暴虐を振るって戦い抜いたという――

「『実戦じゃその場にある物も使って戦うのは当たり前、弾が切れても機体が動きさえすれば幾らでも戦いようがある』。そんな感じで散々仕込まれましたよ」

「なるほど、中佐の意見は尤もだ。実戦ではBETAの物量相手ではたかが戦術機1機が携行できる弾薬の量など無いに等しい。たとえ短刀しかなくとも弾が切れた状況下においてはそれだけでもあれば立派に戦闘を続行する事が可能であり、我々衛士にとってそれは必須の技能といっても過言ではないだろう。しかし、だとすればやはりあの御仁もまた米軍でありながら得物を選ばぬ立派な武人という訳か……」

世界は広いな、と唯依の口から漏れる。怪訝な視線を送ってくるユウヤに気付いた唯依は小さく咳払いをして誤魔化すが、顔色の赤さ

はすぐには消えないので無理な話ではあった。

そしていよいよ『本題』へと踏み込む。

「貴様の観点からして＜吹雪＞の乗り心地はどう感じた？」

「率直に言って最悪ですね。中尉殿」

唯依のこめかみがピクリと引き攣り、やり取りの様子を窺っていた整備兵達が隠しつつもざわめきだつた。

「主機の出力が低すぎて米軍機であれば問題なく行える機動もまともにできやしない。なのに機体そのものはピーキーで、まるで興奮剤を打ったロバだ。あんな有様じゃいくら練習機だからっていても、俺からしてみれば第3世代って銘打ってる癖にF-15当たりの第2世代機にも劣る機体ですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・言いたい事はそれだけか」

そう問い返すまでの沈黙の長さが、唯依の仮面の下的心情を示しているかのようだった。

よく見れば、自分の二の腕に置いたもう片方の手がきつくその部分を握りしめ、国連軍の制服にしわを作っている。

『ポンコツみたいな機体』

彼は自分が吐き捨てたそんな言葉がどんな意味を持つのか本当に理解しているのだろうか。

＜吹雪＞は日本初の国産第3世代戦術機＜不知火＞の完成直後、それまで日本帝国で採用されていた第1世代型戦術機F-4J＜撃震＞から乗り換える衛士の機種転換訓練用に採用された試作型＜不知火＞をベースに新規に設計し直された機体である。

試作機の発展型とはいえ、完成するまでに注ぎ込まれた開発関係者達の血と汗と涙と時間と労力がいかほどの物なのか。それ以前に＜不知火＞が完成するまでどれだけそれらの苦労を積み重ね、BET Aの被害が次第に膨れ上がる最中どれだけの苦汁を呑んで機体の完成を待ち詫びてきたのか――

それを知らぬくせに仮にも日本人の血を引いていながらよくもそんな暴言が言えるものだ、と唯依は教えてやりたかったが、なまじユウヤがしっかりと優秀な結果を残している現実、そして合衆国大統領の息子の部下であるという要素から不用意に責め立てる訳にもいかず。

ユウヤの暴言への怒りとそれに言い返す訳にもいかないジレンマに苛まれる唯依は、怒りのあまり歯を食い縛りながらも口は閉ざし続け、殺気すら籠った目つきでユウヤをまっすぐ睨みつける事しか出来ずにいた。

叶う事ならこの横っ面に1発、いや武家の名門の名残として先祖代々伝わってきた愛刀でもって一刀に斬って捨ててやりたくすらあったが、立場から許される筈が無いしそもそも刀は唯依の自室に置かれていて手元には無い。

しばし、ユウヤと唯依は真正面から睨み合う。

視線を先にずらしたのは唯依が先だった。このまま続けていたら我慢出来ずに掴み掛かりかねない。

激情に容易く流されそうだった己を深く諫めながら、格納庫から出て行くとする。

「(—————ったく)」

唯依の輪郭が来た時と比べて急に縮んだ気がした。そんな感想を抱いたユウヤは頭をグシャグシャと掻き毟ってから刹那、離れようとしていた唯依の背中に向けて声を張り上げた。

「待ってくれ中尉!!」

「……………まだ何か言いたい事があるのか？」

剣呑さが増した唯依の目元を無視してユウヤはこう続けた。

「さっきの言葉、訂正しますよ」

「何だと？」

「確かに主機の出力は低いとは思いますが、それは米軍機と比較した場合であって機体の軽さを考慮すれば許容範囲でしょう。跳躍後の着地時においてバランスが崩れやすいと感じましたが、機体そのものの反応の鋭敏さを活かして素早く次の機動に移る事を想定したものと推測しています。」

また跳躍ユニット使用による空中機動を行っている時に気付いたんですが、これまで乗ってきた戦術機に比べ機体各部を操作した際の＜吹雪＞の反応がより鋭敏なのは……多分、前腕のナイフシースと頭部のリーダーマストが空力学的に重要な働きを行うからじゃないですか？」

「あ、ああその通りだ」

跳躍ユニットによって飛翔した際に感じた不自然な機体ブレは、＜吹雪＞という機体そのものが空力的な影響を受けやすかった為だ。

今ユウヤが述べた内容は＜吹雪＞や＜不知火＞の大きな特徴と言える。ユウヤ本人にそういった特性を説明せずじまいになっていたのだが、彼は1回乗っただけでそれに気づいたというのか。

「機体そのものは低出力でまとまっている割にマニピュレーター周りは硬めであるのも長刀を使った格闘戦に重きを置いてるから。主機の出力が低い分燃料電池の燃費も良い。とどのつまりこのタイプ97は格闘戦を中心とした長期戦に重きを置いた機体なんだと俺は把握しています」

「……………つまり何が言いたい？」

「別に、ただやっぱりコイツは日本製だけあって米軍の戦術機からかけ離れたコンセプトで開発された機体なんだって事ですよ。あっちの機体に乗りなれた俺にはかなりの暴れ馬ですけど、それさえ除けば中々面白い機体ですね」

「先程までと言ってる事が正反対だな」

「俺からしてみれば、って言った筈ですよ。それにテストした機体の悪い所ばかり見て論うなんて真似はテストパイロットには許されませんし、それに――」

そこまで言うてから、ユウヤも顔を横に逸らす。

まるで恥ずかしくて相手の顔が見れないといったような雰囲気を漂わせながら。

「・・・一方的に悪い所しか見ないで良い部分を見ようとも認めようともしないんじゃない、そいつは単なるクソ野郎だ――そう教えられましたから」

彼の最後の発言にポカンとした表情を浮かべる一同。

不意に生じた沈黙を最初に切り裂いたのはヴァレリオとタリサが我慢できずに噴き出した爆笑だった。

「ぶあっはっはっはっは！何だよそれ！結局素直に褒めたくなかっただけなんじゃねーか！！」

「いやいやいやいや、流石トップガン殿は見る目があるねえ！」

「うるせえ、こっちは真面目に言ってるんだぞ！文句あんのか！？」

「まー仕方ありませんよ。何たってコイツはとびっきりのツンデレってヤツなんですから」

「ツンデレ？初めて聞くわね。どういう意味なのか教えてくれないかしら？」

こちらも大笑いのヴィンセントと上品に口元を隠しつつ唇の端に浮かぶ笑みを隠しきれていないステラ。唯依は呆氣に取られた様子で固まっている。

「『ツンデレ』っていうのはですね、気に入ってる相手に対して日頃素直じゃないくせにたまーに優しくなったり素直になるようなヤツの事を指す言葉だね。最初に言い出したのはゼロス中佐達なんで

すけどこれがまたユウヤにピッタリ当て嵌まるんですよ」

「ヴィンセントメモエも余計な事教えてんじゃねえぞ！」

「それは良い事聞いた！今度からトップガンのあだ名は『ツンデレ』な！」

「ようツンデレ！素直じゃねえなツンデレ！」

「ツンデレツンデレうるせえ！」

未だ動かない唯依を置いてけぼりにして、囃し立てるタリサとヴァレリオ、その2人を追いかけまわすユウヤ達による鬼ごっこが開始される。

立ち尽くす唯依の脳裏にはユウヤの言葉がリフレインし続けている。

『一方的に悪い所しか見ないで良い部分を見ようとも認めようともしないんじゃない、そいつは単なるクソ野郎だ』

——自分は彼の本質や背景といったものを無視して、『日本人の血を受け継いでいながら米軍に組する裏切り者』というバイアスをかけてでしかユウヤを見ていなかったのではないか？

「（やはり唯依はまだまだ未熟です、叔父様）」

尊敬する巖谷中佐であればそんな色眼鏡をかける事無くユウヤのよ
うな米軍の人間相手でも平等に接していただろう。

一気に視野が広がったような感覚。

自分に足りなかったのはこれだったのかもしれない、と唯依は思っ
た。

TE編5..彼と彼女の事情（後書き）

ユウヤ||ツンデレと言わせたかった。今は後悔している

吹雪についてのユウヤの評価が支離滅裂っぽいのは筆者の文章力不足が主な原因です・・・

感想・批評お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3152w/>

The Outlaw Alternative

2012年1月10日01時08分発行